

文部科学省 **地(知)の拠点** 文部科学省COC+事業
とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム

平成28年度



地域人材の育成に向けた大学と地域の連携

報告書

徳島大学COCプラス推進本部事務局

(研究・社会連携部地域創生課内)

徳島市南常三島町1丁目1番地 (地域創生・国際交流会館3F)

電話: 088-656-9888 FAX: 088-656-9880

e-mail: coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp



徳島大学
TOKUSHIMA UNIVERSITY

CONTENTS

開会挨拶	2
<hr/>	
第一部 インターンシップ教育の成果と定着に向けた課題	
報告1 四国大学、創業支援事業の取り組み	4
報告2 徳島大学、実践力養成型インターンシップの取り組み	7
<hr/>	
第二部 地域との連携事例の報告	
報告1 ボランティア・パスポートの取り組み	15
報告2 地域企業と連携したプロジェクトマネジメント教育	19
報告3 県内企業・農家との連携による新規事業モデルの 検討を通じたイノベーション教育の実践	22
報告4 食物栄養専攻における地域連携の取り組み	26

開会挨拶

とくしま元気印イノベーション人材育成協議会会長
徳島大学長

野地澄晴

皆様こんにちは。今日は日曜日にもかかわらず、FD 地域人材育成フェスタを開催いたしましたところこの様にお集まり頂きまして本当にありがとうございます。今日はこのような地域人材の育成に向けた、FD、ファカルティ・ディベロップメントの場を設けさせて頂きました。大学の教員の教育能力を高めないと大学の本務である人材育成ができないという視点から、この20年ほど大学が取り組んでいる教職員が教育の力を高めるための研修がファカルティ・ディベロップメント、略して「FD」と呼んでおります。

本COC+事業は人材育成がメインとなります。「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」と呼んでおりますが、県内の高等教育機関、徳島県を代表する自治体、それから地元企業様あるいはNPO様、そういった三者が一緒になって、徳島県を元気にして徳島県の産業をさらに発展させていくポテンシャルを持った人材を育成し、結果として県内就職率を上昇させることが、事業の目的となります。そのためには、参加する高等教育機関の教員、また育成に関わって頂く様々な地域の方の教育能力を高めていくことが非常に重要です。

産学官連携という言葉はもう使い古されておりましたが、ずいぶん長い間進められてきておりますけれどもそれは主には研究開発や産業開発などが中心でした。この事業では、人材育成面で産学官のしっかりとした連携をつくって参ります。まず高等教育機関、大学、そして高専を含めて、徳島県内で一体となって取り組みをするというのもこの事業がはじめての事になります。

さらにそれに加えて、大学という建物のキャンパスの中に留めるのではなく、外に出て地域の皆様方と一緒に大学生をしっかりと育て、彼らに卒業後は地域のイノベーションの中心になっていってもらうという、大変意欲的な事業であります。

そこで、FDではありますが、強いられる課題としてではなく、人材育成の取り組みの中で自分達も達成感が得られる、また地域が本当にそれを通じて元気になっていく実感を持てる、そのような中で自発的な教職員の学びの場が盛り上がっていく、ある意味でお祭りのような状況を目指すという意気込みを込めて、本会を「FD 地域人材育成フェスタ」と名付けました。

今日は、二部構成となっております。第一部は、「インターンシップ教育の成果と定着に向けた課題」と題しまして、四国大学様の創業支援事業の取り組み、それから徳島大学が中心になって行っておりますインターンシップの開発についてご報告させていただきます。インターンシップにつきましては、まだまだ日本においては十分内容の充実したものにまでは到達していないという認識を私達は持っております。学生を受け入れて頂く会社等の方と大学、そして学生が連携し合い人材育成の手法を生み出していくということで、事業の中心となる取り組みです。第二部は、「教育における地域との連携」と題しまして、事業に参加している高等教育機関で取り組んでいる地域と連携した取り組みを報告させていただきます。

四国大学、創業支援事業の取り組み

四国大学創業支援クリエーター 里見和彦

徳島大学生物資源産業学部 山口舞夏、井上朋美、松村沙紀、戸川聖香

四国大学経営情報学部 南鈴香

里見と申します。よろしくお願いいたします。今日は最初に私の方から事業の全体について説明させて頂き、その後学生から、事業の一環でビジネスプラン道場というプログラムを実施したのですが、そのグランプリのチームに発表をして頂きます。後もう1人四国大学より感想の発表をして頂きたいなと思っています。

創業支援事業の取り組み

私の所属しております四国大学では、3年前よりCOC事業に採択されまして、地域との連携活動を進めてきました。また昨年度からはこのCOC+事業にも参画しております。四国大学の県内の就職率は既に70%を越えております。その中で就職率を10パーセント高めるのは非常にハードルが高いため、別の形で事業に貢献する、それが創業支援という形です。

創業支援と聞くと、学生にリスクのあるようなベンチャーをさせるという印象を持たれるかもしれませんが、全くそういう風なものではありません。今後不安な世の中の中で、10年後20年後もしくは60歳で定年を迎えた中で、年金プラスアルファ仕事を創り出せるような、人材になって欲しい。就職して与えられるだけの仕事だけではなくて、仕事を創り出せるような人材になって欲しい。そのような思いで取り組んでいる事業です。

また、学生が県外に一度出ても良いと個人的には思っています。卒業後に県外、海外にどんどん出ていったとしても、今この学生時代の活動の中で、様々な徳島の企業や社長とつながりを得ていることで、ウミガメのように戻って来てくれる。良い仕事がないから徳島には戻れないというのではなくて、仕事を創り出せる人材になって徳島に戻ってくる。と、そういう意味で大学の期間中に、できるだけ多く徳島でビジネスに関わる接点を提供するのが創業支援の取り組みです。

事業は4本柱です。ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」、とくしま学生ビジネスプラン道場、社

長のかばんもち、チャレンジショップ。チャレンジショップに関しましては来年からのスタートになります。COC+事業ですので、四国大学だけの取り組みではありません。徳島大学、徳島文理大学そして阿南工業高等専門学校さん徳島工業短期大学さんの連携事業として一緒になってやっております。

「とくしまサイコー塾」

「とくしまサイコー塾」ですが、キックオフセミナーを6月4日に開始しました。社会企業大学の学長、田中勇一学長に来て頂いて、新しい生き方働き方としての社会起業家として講演を頂き、その後学生を交えたグループディスカッションを行いました。様々な学生から意見が出て、今後の活動には出来るだけ学生の意見を取り入れていこうということになりました。2回目からは定例会として、毎月第2木曜日の夜に四国大学、徳島大学、徳島文理大学と会場を持ち回りして定例会を開催しております。最初は阿波女あきんど塾から2名の講師の方をお招きし、社長の生き方考え方を聞きそしてその後グループワークとして、女性の特長を生かした創業のメリット・デメリットをテーマにディスカッション。第3回は徳島大学で開催、徳島県の倫理法人会から2名の社長をお招きし、何の為に働くか?というテーマでディスカッション。4回目は徳島文理大学で、中小企業家同友会から2名の講師をお招きし、企業が求める人材とはというテーマでディスカッションをしました。このように、大体2時間のプログラムですが、2時間を30分、30分2名の社長さんに生き方考え方をプレゼンして頂き、残り1時間をグループでディスカッションするという形、月に1回必ず集まって情報を交換し、様々な方と出会えるイメージで、これまでに7回開催致しました。

学生ビジネスプラン道場

次に学生ビジネスプラン道場です。簡単にいえばビジネスプランコンテストですが、単にコンテストで表彰するという意味合いのものではなくて、道場と名付けたように教育的要素を盛り込んでいます。例えば、7月17日に実施したキックオフセミナーでは、伝統工芸とデザインを合わせた形で徳島の藍染めなどを商品にして、世界にブランディングを展開している矢鳥里佳社長をお招きして、矢鳥社長自身も学生時代に起業されているのですが、その実体験などを交えてこれからコンテストに参加する学生に向けて講演を行ってもらいました。

さて、コンテスト自体には82チーム169名の応募がありまして、その中から1次審査で17チームを選出しました。その17チームに対してブラッシュアップセミナーとして、ビジネスプランの作り方を再度レクチャーした後、2次審査は実際にプレゼンテーションを行ってもらい、面談の質疑応答も含めて審査致しました。2次審査参加の14チームから6チームまでここで絞りました。さらに2次審査を通過した学生にブラッシュアップ会を行い、最終審査はこのグランヴィリオホテルで、6チームがプレゼンテーションしました。今日グランプリのチームが来ておりますので、後ほどグランプリのプレゼンを、少し時間を短縮した形で見て頂きたいと思います。

社長のかばんもち

次に社長のかばんもちです。このプログラムはこれからスタートしますが、まず四国大学の方で試験的にスタートしました。吉野川タクシーを継ぎ、配車管理システムの開発を行う(株) 電腦交通を立ち上げた近藤社長、スマホ堂の森田社長、パッケージ松浦の松浦社長、徳島炭市場の渡辺代表の4社の方のもとに7名の学生がお邪魔をさせて頂きました。単に社長のかばんもちをして社長の生き方考え方、社長のスピード感を感じるというだけではなくて、秘書的な活動しながら会社に対して学生として何か提案が出来ないかという事で、1ヶ月間のかばんもちが終了した後に提案を考えてもらい、最後に報告会を実施しました。今日は後ほど、実際に抱持ちに参加した学生の作った提案を発表してもらいます。来年度は、いよいよ本格的にスタート致しますので、是非四国大学だけではなく、参加校の皆さん参加をして頂きたいと思っています。

学生の成果報告

さて、僕の話は一旦終えて、学生ビジネスプラン道場において、最優秀のグランプリを取ったチームのプレゼンを見て頂きたいと思います。徳島大学の生物資源産業学部の1年生グループです。まだまだ至らないところはあるかと思いますが、大学生1年生のここまでしっかりとプレゼン出来る様子を新鮮な思いで見て頂けると思います。よろしくお願ひいたします。

徳島大学生物資源産業学部

井上朋美さんからの報告

こんにちは。これからチームホルスタインのプレゼンを始めさせて頂きます。徳島大学生物資源産業学部の山口舞夏、井上朋美、松村沙紀、戸川聖香です。よろしくお願ひいたします。今回のビジネスプランを思い立った動機は6次産業化を推進し、徳島県と徳島大学生物資源産業学部の発展に寄与する事が出来ると考えたからというのは真面目な方といえますか実際は建前で、ただ単に私達の夢を詰め込んだ結果この様になりました。

事業内容としては、首都近郊に5階建ての建物を運営します。建物全体の店名はカンパーニュ、フランス語で田舎という意味があります。1階は販売コーナーとします。ここではすだちや鳴門金時の加工品、フィッシュカツや地酒など徳島県の名産品を販売します。2階は県産の食材を用いた料理が楽しめるカフェとして利用します。2人がけ席は可動式なので来店される人数のお客様に応じて変える事が出来ます。またカウンター席は調理風景が見える事が醍醐味なので調理過程が見たい方におすすめします。更に期間限定で徳島ラーメンフェアや和三盆フェアを開催したり徳島県の生産者を招いて商品のPRの機会を設けたりします。

3階、4階は徳島県のブランドであるももいちごを1年中栽培し、いちご狩りが体験出来ます。新しいものが好きな若者や家族連れをターゲットとしたフロアです。ここで収穫したいちごを2階で加工してもらって食べる事も可能です。いちごは近隣のケーキ屋やレストランにも販売し、店の宣伝効果も図ります。5階はきのこや微生物の培養と実験が出来る設備です。

さらに、屋上に収穫体験が出来る畑を設けます。トマトや胡瓜を栽培すると共に、徳島県の鳴門金時や大根も栽培し実際に収穫してもらいます。生産者が見える環境で自ら収穫するという都会ではなかなか味わえない体験が出来ます。収穫に必要な農具の貸し出しを

行い、農業に関する知識やノウハウを教える事で利用者は買い物帰りに、手ぶらで野菜づくりが出来る仕組みです。自分自身で取ったものを持ち帰って調理し自分で食べる「自裁自食」がコンセプトです。

こうして第1次産業に触れる機会を設け、多くの方に農業について興味を持ってもらい、6次産業化を推進していきます。販売促進方法としてはお客様のSNSで情報を発信してもらい割引を提供するほか、自分達でもインターネットやSNS等を利用し情報を随時更新していきます。

月商については1階の販売コーナーで150万円、2、3階のカフェレストランでは1日にランチで2,000円×30人、ディナーで5,000円×20人が30日で480万円、3、4階の植物工場では1日に20人大人が来ると仮定し、20×1,500円×月30日で、90万円、いちごの卸売りで150万円、屋上の収穫体験では、3,000円×25人×月4回開催で30万円を予想しています。ここから支出を引きまして、最終的な月の営業利益は36万円と予想します。開始時の資金計画も作成しましたが、3、4階の植物工場の設備費が高くなってしまったので、かなり割高にはなっています。

最後にこの事業のアピールポイントとしては、都会ではなかなか出来ない自分で収穫したものをその場で食べるという体験が出来る事。季節外れの夏にもいちごの収穫が出来る為夏休みを利用した集客も見込める事等が挙げられます。そして徳島大学生物資源産学部の学生のインターンを受け入れたり、県内の食材を利用する事で得た利益を、徳島の農業従事者への支援金としたりする事で徳島の農業の活性化に繋がります。結果徳島県全体の活性化に繋がると確信しています。

(里見クリエイター)

全国的に色々なビジネスプランコンテストがある中で、まだまだのところはありますが、短い研修の中でゼロからビジネスプランをここまで組み立てています。夢を夢のまま終わらせないために形にする、数字に落とすなど、筋を立てて考える。そうすると価格設定やマーケティングなどが大事ということが分かってくる。一旦ここに目が向き始めると、これからの日常生活の中でお店に行ったり、テレビで紹介されたビジネスを見た時に、その経営の仕組みを考えてみると、日常生活の中でのアンテナが高くなる。こういう事が教育的な効果として見込めると思っています。続きまして、四国大学の方より学生の発表をしたいと思

四国大学経営情報学部

南鈴香さんの発表

これから社長のかばんもちととくしま学生ビジネスプラン道場から得られた学びについて私四国大学経営情報学部の経営情報学科南鈴香が発表します。

まず社長のかばんもちについてです。私がお世話になった会社は、パッケージ松浦です。簡単に会社紹介をさせていただきますと、代表が松浦陽司様、業種はパッケージプロデュース業です。パッケージによって売れる仕組みを作る会社で、パッケージマーケッターとして商標登録を行なっています。2日間社長の秘書として同行させていただき、特に印象的だったのはとくとくターミナルでの売り場で、お客様を喜ばせる仕掛けを実際に見た体験でした。半田そうめんの売り場には夏の涼しげな演出をする為に手作りのししおどしをはじめとした、面白いポップが沢山ありました。

このような学びの経験から、社長のかばんもちプログラムの参加後にいくつかのチャレンジを行いました。1つ目は売り場での学びから、アルバイト先のセブンイレブンでお客様を楽しませるための工夫として、ハロウィーンのコスプレが出来るスペースを作りました。実際に使ってくれるお客様もいて嬉しかったです。2つ目は松浦社長に対して業務改善の提案をさせていただきました。朝礼時に頑張る事を発表して記入する「今日頑張ります宣言カード」です。発表するだけではなく、昨日の宣言内容への反省を振り返って毎日5段階で評価します。1日のはじまりに目標を立てる事で気が引き締まり、皆に頑張っている事を共有することができます。朝礼に実際に取り入れていただきました。

次に、とくしま学生ビジネスプラン道場についてです。経営情報学部の3人グループでコインランドリーの待ち時間にカラオケをする「コインヒトランドリー」のアイデアを提案させていただきました。ビジネスプランを完成するまでに実際にコインランドリーに行ったり、ブラッシュアップセミナーに参加し沢山のアドバイスを頂いたり、メンバーとの話し合いを繰り返すことで、オリジナル性を出してきました。先程のホルススタインさんにはかなわなかったのですが、準グランプリを頂く事が出来ました。

社長のかばんもち、とくしま学生ビジネスプラン道場、今回は紹介する事が出来なかったのですが、とくしまサイコー塾などのCOC+事業に参加する事によって普段なかなか関わる事のない様々な職業の人等に出会う事が出来ました。出会った人から、さらなる出会いの場の情報を得る事が出来、どんどんと人の繋

がり広がりました。来年度についても社長のかばんもちや、とくしま学生ビジネスプラン道場に出場しグランプリを目指して頑張りたいです。ご静聴ありがとうございました。

(里見クリエイター)

ありがとうございました。雰囲気に対する緊張感が伝わるプレゼンテーションでしたが、こんな感じで学生が様々な事にチャレンジすることで、仕事は自分で創り出すものという事を体験して頂き、そして色々な県内の社長さん達とのつながりを得て欲しいと思っています。社長のかばんもちなど、受入先のリスト見て頂いたら分かると思いますが、本当に小規模の企業で

第一部	インターンシップ教育の成果と定着に向けた課題
報告 ... 2	徳島大学、実践力養成型インターンシップの取り組み
徳島大学 COC プラス推進コーディネーター・特別准教授 川崎克寛 大塚テクノ株式会社人事総務部部长 千葉雄介 有限会社榎山農園専務取締役 榎山直樹 徳島大学総合科学部 青山晃奈、谷和紀 徳島大学工学部 片倉悠暉	

(司会)

徳島大学 COC プラス推進コーディネーターの川崎克寛から「実践力養成型インターンシップ」の取り組みのご報告をさせていただきます。まず、インターンシップ全体の流れについて大塚テクノ株式会社人事総務部部长の千葉雄介様、同社でのインターンシップ修了生の青山晃奈さんと谷和紀さんに、取り組みの成果について発表していただきます。次に、インターンシップから得られた学びについて、一般社団法人徳島新聞社におけるインターンシップ修了生の片倉悠暉さんからお話を頂きます。最後に企業から見たインターンシップについて、有限会社榎山農園 専務取締役 榎山直樹様からお話し頂きます。それでは川崎コーディネーター、青山さん、谷さんよろしくお願いいたします。

(川崎コーディネーター)

徳島大学 COC プラス推進本部 COC プラス推進コーディネーターをさせて頂いております川崎と申し

す。でも徳島で活躍されていて人材育成に凄く熱い社長さん達です。そこをお願いをして社長の生き方・考え方を教えて頂く風なプログラムになっています。そういう社長さん達と学生が出会う事によって何が起るかということ、社長って特別な存在ではないということがわかる。携帯電話を忘れて、時間を守れず社員に怒られたりして、普通の人なのだけど責任感が凄くあって、常に夢を持って夢をかなえる事に必死で、と生の社長を見ることが出来る。また、社長によって様々な働き方、社長になったそれぞれのきっかけなど、直接話を聞く事によって学生達が自分の人生とリンクをさせて頂きたいと思っています。

ます。よろしくお願いたします。実践力養成型インターンシップの取り組みについてご報告させていただきます。今、正面に映っておりますこのスライド(写真①)



写真①

ですが、COC プラスという事業の全体図です。事業の中の徳島大学の教育カリキュラム改善の一つに「寺

子屋式インターンシップの導入」とあります。これは、本学教員が県内協働機関様と連携しながら、事前学習・インターンシップ・事後の振り返りまで、チュートリアル方式でプログラムを進める新しい形式のインターンシップを開発する試みです。開発を進めるための試行として今年度実施したのが「実践力養成型インターンシップ」です。

インターンシップ実態調査

実施に先駆けて、平成 28 年 2 月に、インターンシップの実態を調べるための調査を行いました。まず、本学学生約 300 名に対してアンケート調査を行いました。その中で、短期インターンシップ、これは本学がすでに正課科目として実施していたインターンシップですが、これを受講した理由として多かったのが、単位取得の為、今後の学生生活の目標を明確にする為、選択必修の他の科目の抽選に漏れた為、と今ひとつピンとこない理由が上位 3 つを占めました。

県内企業に向けてのアンケートも実施し、61 社から回答をいただきました。多くの企業がどのような理由で学生のインターンシップを受け入れているかを尋ねたところ、企業の社会貢献、受入担当社員の成長に役立つと大きく 2 点の回答が多かった。また、受け入れのデメリットとしては、学生の世話の負担が大きいという回答が多い。

さらに、学生や企業の方にヒアリングを行いました。様々な方から話を聞く中で、見えてきた事があります。受け入れ側の企業様は、何となく他がやっているから受け入れなくてはいけないと思ってしまう。学生はどうやらお客様扱いされている。学生の話の聞いてみると、会社がどういった仕事をしてきたかを見る事が出来た、業務を体験し何となく仕事のイメージが掴めた、というような学びに留まっている。そこで、学生は目的意識を持って主体的に取り組める、企業側はインターンを受け入れる事のメリットを明確に認識している、このようなインターンシップが必要なのではないかと考えました。

インターンシップを受け入れるメリットについては、企業から次の 4 つの声が出てきました。1 つ目は、雇用機会の創出が図れること。2 つめは、業務の改善に寄与すること。3 つめは自社の人材育成に対する効果。これはアンケートでも多くの企業さんが回答されていましたが、学生のインターンシップを受け入れた時に、担当者となった若手の社員がその後非常に伸びている。学生が入る事が社員の育成に繋がっているという認識があります。最後に企業の CSR として PR

の機会になっている。このような点もインターンシップを設計していく上で考慮していかなければならないということが見えてきました。

実践力養成型インターンシップの開発

私達の課題であるインターンシップの開発ですが、対象は学部生になります。これまで大学が行ってきた共同研究や産学連携とは異なります。また、教員が少人数の学生を担当して「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返すことが今回のインターンシップの趣旨でありますから、業務体験型や見学型のインターンシップでは成立しない。このような事業趣旨に沿いつつ、効果のあるインターンシップの仕組みをどのように作るか。ここが試行を始めるにあたって一番の力点をおいたところです。実際にインターンシップの効果の享受者になります、学生と地域の企業の方の声を聞くため、平成 28 年 3 月に学生、社会人、大学職員が一堂に集まってインターンシップのあるべき姿について気軽に話し合う、フリートークの場を設けました。そこで行うべきインターンシップの姿がある程度見えてきました。

インターンシップのスタイルは、仕事理解型、採用直結型、業務補助型、課題協働型、事業参画型の大きく 5 つに分類できると思います (写真②)。大学が関わる



写真②

る意味、企業様のメリット、学生の成長等を鑑みまして、課題協働型のインターンシップが求められている形ではないかと考えました。企業の課題に学生と企業の方が一緒になって取り組める課題を設定することが重要で、なぜかという、学生がお客様扱いされず、学生と企業の双方が本気になって取り組んでいく場が求められていると、このような声が上がってきたからです。

このようなスタイルで設計を進めた実践力養成型イ

ンターンシップのスケジュールですが、非常に長期にわたって行うことになりました。学生の取り組みは平成 28 年の 6 月からスタートして、現在 2 月の半ばですが実はまだ 2 つほどプロジェクトが続いています。半年ないし 8 ヶ月という期間が必要となるのですが、やはり長期であればあるほど、学生と企業の関係が深まっていく。企業の方と学生が 1 つのプロジェクトを一緒にする中で様々な事があり、それぞれがお互いを育て上げる機会になります。

実践力養成型インターンシップの流れ

それでは、インターンシップの流れを、順を追って見ていきます。まず、4 月から 5 月に企業を訪問して受入先の団体を選定しました。徳島県の企業の中から COC + 事業の趣旨とインターンシップの目的を鑑みまして、まず 55 の団体をセレクトし、その中から 28 団体を訪問させて頂きました。その中で方針に合意して頂き、協力頂けたのが 8 団体です。圧倒的に少なくなりましたが、何故かという課題協働型のインターンシップの受け入れは企業にとっては負担が大きいです。最初に訪問した時には企業の状況や経営課題をヒアリングして、そこから学生が出来るプロジェクトの内容に切り出していく。会社の将来ビジョン、どのような課題に取り組んでいるか。その中で、学生に取り組んで欲しい事は何か。本当に企業が必要とする課題に学生が取り組むことにメリットを感じて頂かなくては、プロジェクトが成立しません。

受入団体とプロジェクトが決まると、学生にプロジェクトの内容を伝えるインターンシップフェアを実施しました。これは 6 月 2 日に行い、80 名程の学生が集まってくれました。受入団体の方にプロジェクトを紹介するプレゼンテーションをして頂いて、その後学生がその興味のある団体のブースに移動して具体的な話を聞くという流れです (写真③)。そこで学生がプロジェクトにエントリーして、受入団体との面談の後、



写真③

正式に参加が決定する。面談の中でエントリーした学生も何人かは不採用になっています。採用に落ちるのも 1 つの経験として捉えてもらえるように、後ほどフォローを行いました。

6 月の下旬から 8 月にかけては、学生の事前研修を行いました。大変だったのが時間調整です。学部も違う、学年も違う。その学生達の時間調整を図りながらプロジェクトメンバーで集まり、課題に取り組むにあたっての前提となる学習を進めていく。その時間調整に大変苦労しました。

また、受入団体の方に向けても事前研修を実施し、インターンシップ生の受け入れで注意して頂きたい点をお伝えさせて頂きました。ここは非常に重要です。受入体制を整備して頂くということで、プロジェクトの設計と学生に担ってもらう仕事について再確認を行いました。あとは受け入れに際しての心構えの部分です。学生をお客様ではなく大人として扱ってもらうこと、プロジェクトのスタートが重要であること、壁にぶつかった時こそが互いの成長のチャンスであること、などをお話しさせて頂きました。特に壁にぶつかった時について、どういう状況で学生が壁にぶつかるのか、取り組みが止まってしまった時にどのように対応できるのか、目標を見失ったり、現状に満足したり、様々なケースに対する対応や、プロジェクトが不完全燃焼で終わりそうな時の対策など、重点的にお話しさせて頂きました。あとは法的に気をつけることの説明です。

さて、7 月中旬から 12 月。いよいよ学生が実際のインターンシップに取り組みましたが、皆さん本当に大変な思いをしながら切磋琢磨してきました。9 月から 10 月頃にはチームの中では仲違いが起こったり、出席率が非常に悪くなってきたりもしました。そこで、第 3 コーナーを回ったあたりの 10 月 26 日に中間報告会を実施して、他プロジェクトの参加学生とも課題を共有しながら、もう一度目標に向けての意思確認を行いました。

プロジェクトを終えた後、1 月 21 日には本学のけやきホールにて、最終報告会を実施しました。さらに、つい先日 2 月 16 日には、インターンシップで得られた学びを定着させることを図りまして、振り返りのワークショップを実施しました。ここまでの今年度実施した実践力養成型インターンシップの大きな流れです。

インターンシップ修了生と受入担当者からの報告 川崎克寛 COC プラス推進コーディネーター

いよいよここから実践力養成型インターンシップについて実際その現場で活躍された方々に報告をして頂きたいと思います。最初に受入団体の大塚テクノ様の担当者様に報告頂きます。大塚テクノという会社ですが、皆さんご存知だと思うのですが大塚グループの1つです。事業内容として、プラスチック成形品の製造販売をしております。設立は1985年非常に歴史の長い会社です。

大塚テクノ様には昨年の春、企業の課題をお伺いしました。すると、新卒採用においてエントリー者数の確保が非常に難しくなっている。採用媒体が学生目線にできておらず、企業として学生に与えられるインパクトが弱いことが薄々分かっている。と、このような課題から、学生目線の採用ツールを提案するというプロジェクトのミッションを設定しました。このような企業の課題に対して、インターンシップ生がどのような取り組みを行い、どのような成果を挙げたか、そしてそこから学生が何を学び取ったか、そういったところを読み取って頂ければと思います。

インターンシップ修了生 谷和紀さんの報告

それではただいまより大塚テクノ株式会社での、インターンシップの流れと学びについて徳島大学総合科学部3年の青山と谷が報告させていただきます。よろしくお願いたします。

大塚テクノ株式会社は大塚ホールディングスのグループ会社であり、その中でも医療系プラスチック成形品の製造販売を主な事業内容としております。ここで技術職ではなく人事部にて、約2ヶ月間のインターンシップを行って参りました。まずインターンシップの概要といたしまして、ミッションの確認。それと最終成果物の紹介を簡単に行います。

大塚テクノ株式会社では近年採用における新卒の応募者数が横ばいの状態が続いております。現状で大塚テクノが抱える課題は、まず新卒の応募者数を増加させる事。求めている分野、特に機械工学系の学生の確保が挙げられます。その課題を解決する為に、経営戦略に基づいた人材確保の為のツールを作成する。この様なミッションを頂きました。最終的に取り組みの成果物を2つ作成しました。1つは2018年の採用に向けたパンフレット、もう1つは就職説明会、企業説明会で使用するスライドです。1つずつ詳しく見てい

きたいと思います。

パンフレット作成の取り組みですが、これまでのパンフレットでは就職後のイメージが掴みにくいということから、社員の方の1日のスケジュールを載せる事と、仕事内容のインタビューを載せる事で仕事に対するイメージを持ってもらえるように改善しました。また、社内の雰囲気が伝わりづらいということから、職場の人間関係が伝わるようなトピックを設けると共に、写真を多用する事で社内の雰囲気を伝えるように改善しました。よろしければ、後ほどお手元のパンフレットをゆっくりご覧下さい。

次に、スライド作りの取り組みについて紹介します。まずこれまでのスライドを分析し、課題点を検証しました。大塚グループである事のアピールが少ない、就活生にとって自分が就職した後のイメージが湧きにくい、企業説明に重点が置かれていて採用の流れが伝わらない、以上3点を問題点として抽出しました。そこで、スライドの改善・改革の3本柱を掲げました。1つ目は大塚グループが親会社である事を最大限に生かし、大塚のイメージを持ってもらうという事です。2つ目は就活生に就職後のイメージを持ってもらう為に人と製品を結びつける事です。3つ目は就活生にとって重要な点をしっかり伝える事です。

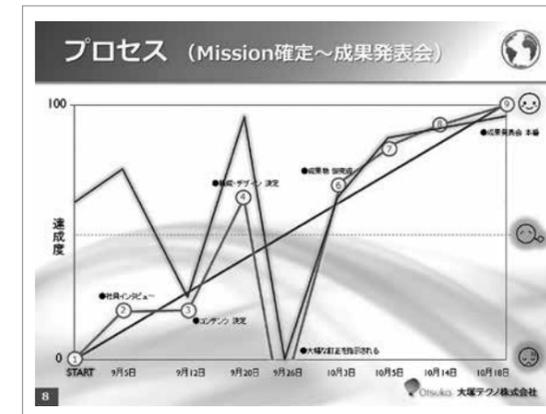
インターンシップ修了生 青山晃奈さんの報告

続きまして私達がインターンシップに携わった、全体の流れについて報告します。まず、参加するきっかけとなったインターンシップフェアに参加した主な動機、理由は、私達が夏に何かやり遂げたい。また自分の成長につなげたいという理由からでした。そこで大塚テクノ株式会社のプロジェクトを選んだ理由は、ものづくりの企業の会社の中身がどうなっているのか、また広告や企画についてもっと知りたいという希望からでした。インターンシップフェアを通じてミッションの内容を知り、プロジェクトへの関心が得られました。

続いて事前研修で学んだ事を報告します。主に3つ、インターンシップ遂行の為の基本的な情報収集、また社会人としての基本動作やマナー、受け入れ先企業の社風や企業文化についてです。情報収集というのは作り上げたパンフレットにも関係するのですが、他社のパンフレットで良いところを皆で共有し、また人事部の方にも見て頂きました。社会人としての基本動作やマナー、というのは座り方や立ち姿勢、お辞儀の仕方、名刺の渡し方等、自分達が知らなかった事を学び、こ

れまでの自分達の態度を客観的に見つめ直す事が出来ました。社風や企業文化というのは社内で社員さんがどの様に働いていらっしゃるのかなど、全体的な雰囲気や掴みかけとなりました。

続いてインターンシップのプロセスについて説明します。こちらのグラフ(写真④)ですが、横軸がイ



写真④

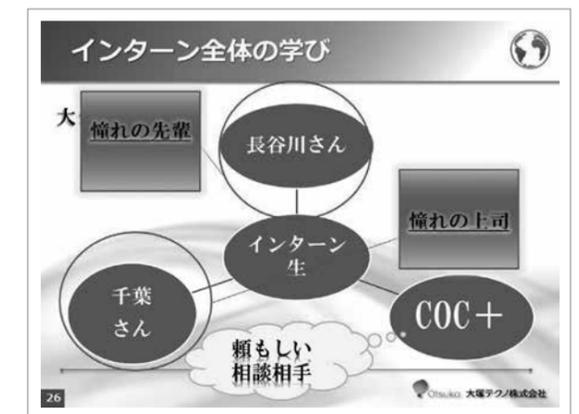
ンターンシップ開始日の9月5日から成果物の発表の10月18日までの日付になっています。そして縦軸が達成度になっています。最初予想されていたのはこちらの比例した達成度、だんだんと、どんどん達成度が積み重なっていった最終的には100%になると予想していたのですが、実際はこういう風にジグザグになってしまいました。グラフに1番から9番まで番号を振っているのですが、真ん中の9月26日の5番が1番どん底です。9月5日に社員のインタビューがあって9月12日にコンテンツが決定し、9月20日に構成デザインの決定と順調に進んでいたのが、9月26日に大幅な訂正が指示され、達成度が振り出しに戻ってしまいました。その後、10月5日成果物の仮完成、最後の10月18日が成果物の発表会です。

続いてこちらのグラフは私達のモチベーションのグラフです。このグラフを作ってみて、モチベーションが上がっている時と達成度というのは結構関連があり、モチベーションを保つという事は小さな達成度の積み重ねであるのかなと分かりました。2番から3番は頑張っても成果が出なかった時期です。それまでは日常的な会話をするぐらいの関係のチームだったのですが、はじめてプロセスについて考えたり、これから成果物をどう完成させるのか、プロセスをどうしていくのかという事を話し合うようになりました。

1番重要な落ち込み期ですが、それは私達の中で問題ないと思っていた作成案、こちらの成果物で一旦インターンシップは終わるだろうと思っていた成果物について、やり直しが指示されました。しかも結構大幅

なやり直しです。この時にこれまでの作業の振り返りと、今後の対応を考えていく中で得られた学びがいくつもあります。役割分担や仕事に対する自覚の重要性に気がついたことと、何より効率性が大切だという事を学びました。何故効率性が大切かといいますと、納期が迫っていた時期に、それぞれのメンバーが沢山の予定、サークルや講義、他のレジャーなどを抱えている。平行してプロジェクトをやり遂げるには何と少しでも効率良く仕事を終えなくては行けない。このような点に意識が向くようになりました。そして、情報共有の重要性です。私達は情報共有、単なる情報共有だけではなく、成果物がどこまで進んでいるのかという詳しい進捗というのも頻りに確認し合うようになりました。大塚テクノ様側からも目標や目的がしっかりと提示されていたので、より仕事がスムーズに行えた様に思います。またメンバー自身のそれぞれの性格とか、凄く強みなどところがあるってそちらの方も私達の落ち込み期を支えた大きな力となりました。

最後に、インターンシップフェアから事前研修までに企業側と学生側のイメージの共有。成果物に対するイメージの共有が出来ていたことが、目標達成には大きかったと思います。また、プロジェクトの進め方にある程度自由度があったので、私達学生も無理なく、自由に作ってもいいんだという感じで取り組みました。こちらの図(写真⑤)を見て頂きたいのですが、



写真⑤

私達のプロジェクトは大きなチームで進めてきたという思いがあります。受入担当の千葉さんと長谷川さんは、憧れの上司と憧れの先輩という感じで、千葉さんは全体の監督役、長谷川さんは全体のお姉さんという感覚で接する事が出来ました。本当に細かい気遣いもして頂きました。先日、インターンシップの取り組みを紹介するパネルディスカッションが行われたのですが、千葉さんが発表で使われたパワーポイントの内容に、私達が手がけたデザインが少し入っていたことは

とても嬉しかったです。またCOCプラス推進本部の方々も、頼もしい相談相手として私達が困った時はいつでも手を差し伸べて下さいました。この様に細かな配慮が行き届く、またプロジェクトのメンバー1人1人を見てくれるような素晴らしい上司になりたいなと思いました。最後に私達は単位の数、30単位だとか40単位だとかそういう単位の数では回りきれない、語りきれない様な経験を積む事が出来ました。大学に籠もっているだけでは体験出来ないような事も沢山学びました。そして何よりも大塚テクノ様の会社の中身を実際に見る事で、社員さんがどう生き生きと働いているのか、自主的に取り組んでいるのかという事も理解出来ました。本当に良い経験をさせて頂きました。ありがとうございました。

大塚テクノ株式会社人事総務部部長 千葉雄介様の報告

皆さんこんにちは。大塚テクノで人事総務部の人事を担当しております。千葉と申しますどうぞよろしくお願いたします。本日はインターンシップを受け入れるにあたり、事前に社内で準備した事、それとインターンシップを終えて社内、メリットや享受出来た事を簡単にご紹介させて頂きます。まず当社が求めた成果というのは先程2人からご紹介があった通りですが、今回インターンシップを受け入れるにあたった経緯についても、少し触れたいと思います。先程川崎コーディネーターからも候補企業が55社からどんどん減って行って、7社という事になったという話がありましたが、今回インターンシップの話を頂戴した時に学生をお客様としてお迎えするのであればお断りしようと思っておりました。ただCOCプラス推進本部の方、コーディネーターの方から決してお客様ではなく戦力として考えて欲しいとの話がありまして、受け入れを決意しました。

まず、受け入れを決意した後行った事ですが、社内でインターンシップに対するイメージを払拭する事からはじめました。インターンシップの受け入れ期間中は手間が増えるというイメージが多数を占めておりましたので、そこをいかに払拭するかに注力し、成果あるいは会社にとってのメリットを繰り返し説明する事で社内でも承認を得られ、今回のスタートを切ることができました。

インターンシップを受け入れたメリットですが、3つ紹介させて頂きます。1つ目は、過去数年間着手出来ていなかった明確な課題、採用ツールを成果物とする事が出来、しかも学生の方に作って頂くことで学生

の皆さんの生の声を反映したものができました。非常に大きな成果が得られたと思っています。

2つ目は、社内で学生の皆さんが社員に対してインタビューを実施し、社員が普段仕事、業務の中であまり意識しないような事を質問される事によって、改めて仕事への取り組みを考える機会になりました。社員自身が会社から期待されている姿を理解していないと、求められる人材像を説明出来るものではありません。改めて社員それぞれが自分の目標とする姿、キャリアプラン等を考える1つのきっかけになったと考えています。

3つ目は、当社の長谷川という者がメインの担当としてインターンシップを受け入れさせて頂いたのですが、長谷川が非常に大きく成長したと考えています。4名の学生と一緒に限られた期間の中で成果を出すという、マネジメントの成功体験が自信に繋がったと思います。こういう機会を通じて社員のビジネススキルが向上したことは、会社にとっても非常に大きな財産になったと考えています。

以上、今回のインターンシップを振り返ってみますと、学生さんが想像以上に考えて意欲的に活動してくれましたので、学生を課題解決の中心におきまして、我々は方向性を示しさえする事が出来れば、双方のWin-Winな関係が構築出来ると実感しました。最後にこの場をお借りしまして、関係者の皆様に非常に沢山の山のお力添えを賜りましたのでお礼を言わせて頂きます。本当にどうもありがとうございました。

(川崎コーディネーター)

千葉様、青山さん、谷くん、ありがとうございました。非常に中身の濃いインターンシップでした。学生の方々途中泣きそうな顔をしていたり、一時はもうやめたいんですという声も出てきました。そのような中で彼ら自身が自らの意思で掴み取った成果と思っています。この学びや気づきが、それぞれ狙って得られたものではなく、必死で取り組んだ結果として得られたものであること、これをインターンシップの大きな効用として強調したいと思います。

続きまして、一般社団法人徳島新聞社のインターンシップ生、徳島大学工学部知能情報工学科の片倉悠暉くんに、チームとして取り組むプロジェクトのチームリーダーとして、どのような苦勞、学び、気づきがあったのかという視点で報告を頂きたいと思います。片倉さん、よろしくお願いたします。

インターンシップ修了生 片倉悠暉さんの報告

失礼いたします、徳島大学工学部知能情報工学科3年片倉悠暉と申します。これから一般社団法人徳島新聞社インターンシップのチームリーダーの経験から何を学んだかについてお話をさせて頂きます。今回自分は長期にわたって、徳島新聞社でインターンシップを行わせて頂きました。そもそも自分がこの長期のインターンシップにエントリーした理由は、授業の一環という理由もありましたが、1番の理由としてマスコミ業界がどのようなもので、自分がどのぐらい出来るかという事を確かめたいという思いがありました。

今回の徳島新聞社のインターンシップでは、若者に手に取ってもらう新聞づくりという課題が与えられました。元々学生生活ではあまり苦勞する事もなく、自分のできないことがそれほど明確になる機会がない事もあり、インターンシップのリーダーを任されても何とかやっていけるだろうと思っていました。しかし実際、インターンシップが始まると企画を考える会議の進め方など知らないのも、なかなか議題が決まる事もなく、企画案のイメージ共有に時間がかかりました。これまでは、学生が個人で企画を組んでプレゼンテーションをして終わるという事が多く、皆で決めていく会議の機会がありませんでした。

今振り返ると、自分達のチームの会議では、事前のリサーチ不足で議論に根拠がなく、説得力に乏しかったり、そのような議論を繰り返す中で目標をいつの間にか見失ったりしていました。しかし当時の自分達は精一杯でした。プロジェクトに取り組む中で、この様に初めての事でも進めていかないといけない場に直面する事が多かったです。リーダーとして自分が引っ張っていかないとならない思いが頭の中にあり、締め切りに間に合わせようと、メンバーの一部でチーム全体の方針を決定してしまった事もありました。しかし初めてのリーダー経験で、それが間違ったやり方だと気づく事はなく、メンバーが一部脱退してしまうなど、課題達成の他にもチームマネジメントという難しい課題があるという事実と直面しました。

このように、今回インターンシップに取り組んで、今の自分が出来る事の限界と、社会に出る前に備えなくてはならないことが見えてきました。今の自分は、相手の立場になって物事を聞ける事と、物事を整理してまとめる事はある程度出来ていると思います。これらは、相手の話を整理して上手く会議を進める事が出来ている事や、報告書が分かりやすくまとめられている事について、チームメンバーから評価されたことか

ら気がついた自分の長所です。チームとしてやっていくことで見えてきたことです。

そして、自分が社会に出る前に備えなければならない課題は5つあると分かりました。リーダーとしての課題については、計画性がない。個人としての課題については、伝達力、配慮、気遣い、行動力という大きく4つあると分かりました。企画を考えるミーティングで会議を円滑に進められなかった事を振り返って、これらの課題を実感しました。

例えば、会議を進める中で今回は記事を作り上げるためのコンセプトを決定、共有し、次回までにコンセプトに沿った記事を考えてくる。もしくはデータを集めてくる、という次の段階につなげなければならない。プロジェクトの重要なポイントを押さえて、次のミーティングまでにメンバーそれぞれが果たす役割を決めなければ、プロジェクトが進まないのに、これが意識できていなかった。会議の中でも方針を上手く伝達できず、欠席している人達への報告連絡も表現が曖昧だったり、伝える順番がおかしいので誤解を与えるなど、相手への配慮が足りていない部分がありました。このような実体験から、自分の至らない部分、社会に出るまでに身につけてはならない部分が見えてきました。

もう1つの気づきは、学び方についてです。今回のインターンシップは見本やお手本を知らずに挑み、結果として今の自分の実力、至らなさを確認しましたが、次回は自分の中で見本となるロールモデル社会人を探して、その人の下で一緒にプロジェクトに取り組んでみたいと思っています。具体的には自分はマスコミ業界を目指しているので、マスコミ業界のインターンシップにいき、マスコミ業界の人はどのように計画し、どのような配慮を行って仕事をしているかを観察しながら学びたいと思います。

このように、今回のインターンシップは実践の場で学生自ら考えて、チームで取り組んだことが、自分の実力成長を確認出来る機会でした。次に何を見て学ぼうかといった、学びについて意識できるようになった、自分に足りていない部分が学生生活の段階で気が付いた、貴重な体験だったと考えています。支えて下さった企業様、大学職員の皆様、COCプラス推進本部の皆様、そしてチームメンバーの人達に感謝しています。ありがとうございました。

(川崎コーディネーター)

片倉さん、ありがとうございました。彼、今の報告では終わっているような事を言っていましたけれども、徳島新聞社でのプロジェクトは続行中です。最後

の大きな課題、若者が手に取る新聞のあり方、その提案をするべくチームメンバーと一緒に今もまだ切磋琢磨しています。

最後に榎山農園様からご報告をいただきます。榎山農園様は家業としての農業から、事業としての農業に転換し、6次産業化を図る大きな過渡期にあり、新規事業や社内でベンチャーを起こそうという取り組みに積極的な企業です。インターンシップを受け入れた効果、そして受け入れていく上での課題の2点をテーマにお話し頂きます。では、榎山さんよろしくお願いたします。

有限会社榎山農園専務取締役 榎山直樹様の報告

有限会社榎山農園の榎山と申します。榎山農園というのは本当に個人の農家がつい15年ほど前に法人化をしました。たった15年の間なのですが、劇的に規模拡大をしてきた会社です。当時は家族経営だったのが今や26人の雇用を抱えています。目下、農業は規模拡大というのが止まる気配のない業種です。規模を拡大しながらも、農業をしっかりとこなしていく、地域になくてはならない存在として存在していく為には、企業としての組織化が1番の課題です。そこで、今回のインターンシップで設定させて頂いたミッションは、経営理念を社内で再確認して行くために、経営理念をしっかりと反映したホームページのグランドデザインの作成でした。

これまで、ホームページについては、社内には専門の技術や知識を持った人間がおらず、業者に頼んでいたのですが、それを学生さんと一緒に作り上げたいなという気持ちがあり、引き受けさせて頂きました。今回、複数のプロジェクトがある中で、最多の8名を受け入れさせて頂きました。最初に想定していた成果物として、案としてのデザインをスケッチとして提出してくれという話をしたのですが、最終成果物としてホームページそのものが出来上がってきております。後はFTPとかを使ってアップロードして契約をするホームページになるような形までできました。

その中で大変だったのは、やはり経営理念をいかに反映させるかという部分です。これは、実は社内においても、経営理念を共有するという事が1番の課題となっていて、それができていない。共通の旗印がない人間が集まって農業をすると、バラバラになって上手い事いかない。学生との取り組みによって、私個人としても共有方法を真剣に考える機会となり、一緒にスキルアップさせて頂いたと思います。

経営理念を学生チームと共有するのに相当な時間をかけたのですが、最終報告会では私以上に経営理念を理解しているのではないかというような、しっかりした内容の発表を頂き、私自身懸命に伝えれば伝わるといった達成感が得られました。また、インターンシップでやっている事を社内に戻って我が社の社員に伝える、中間で社員に確認していくことで、社員にも学生の頑張りや経営理念が徐々に浸透しました。これまでは私が現場に出ないと現場が回らないような会社だったのですが、プロジェクトが終わるころ、専務が現場にいらなくても仕事が回るようになりますとある社員が言ってくれました。

そういう意味で直接は会社の組織化と関係のないホームページの作成というプロジェクトだったのですが、会社の組織化に対しても効果があったと考えています。先程発表頂いた大塚テクノの千葉様からもありましたけれども、手本にすべきインターンシップだと思いました。来年は我が社の社員と一緒にインターンシップに取り込ませて頂きたいと思っております。

このインターンシッププログラムですが、最初は凄く負担になると思っていました。しかし、結局は1番やりやすい形にするため、榎山農園に学生は取材とインタビューの2回しか来ていません。それ以外は私が大学に行き、教室と一緒にプロジェクトを進めていきました。その中で、遠い存在だった徳島大学でしたし、学生の顔が見えるようになって凄く嬉しかったですし、サポートスタッフの方々からは僕自身も沢山の事を学ばせて頂きました。

私は今38歳ですが、20年も経ってしまうと今の若い人など全然分からないというイメージがありました。僕らが若い時よりも凄く優秀だと思いました。そんな学生さん達が、榎山農園の社員として取り組んでくださり、私個人も学生を大事な社員と思って接する事が出来ました。会議や作業が夜遅くまで続いても、一緒に付き合って最後までやりたいなと思えました。このような、人と人としてのやり取りが重要であって、インターンシップ生だからとか学生さんだからとか、思い込みで進めては全く効果のない事業だと思います。

互いに感謝しながら1つのミッションを達成させる為のチームとしてやっていくのであれば、これは企業にとっても大きなメリットのある事業だと思います。今後は是非僕1人ではなく、社内の経営指針の中の人材教育プログラムの一環、中心に据えて、社員皆で今後も継続的にやらせて頂きたいと思えました。最後に皆さん、徳島大学の玉先生をはじめ、川崎コーディネーター、本当に長い間だったのですが、いつも

夜遅くまで付き合ってもらきましてありがとうございました。来年もよろしくお願いたします。

(川崎コーディネーター)

皆様ありがとうございました。報告を通して色々な宿題も頂きました。来年度に向けて、大学というある種フォーマルな場に、このような形のインターンシップ、インフォーマルな事が起こりうるプログラムをどのように定着させていくかが大きな課題と考えています。

今年度のインターンシップは広くジェネラルな分野で実施いたしました。来年度は、学内の先生方に協力を頂きながら、専門性の部分と、社会人としての基礎力素養を研くというジェネラルな部分という2つの部分を意識しながら構成していきたいと思えます。学内での定着化にあたっての、学内組織整備も課題です。徳島大学では他にも、様々な地域と協働した教育プロ

第二部		地域との連携事例の報告
報告...	1	ボランティア・パスポートの取り組み
		徳島大学 COC プラス推進監・大学院社会産業理工学研究部教授 玉真之介 徳島文理大学准教授 岡山千賀子 徳島市観光協会事務局長 花野賀胤

徳島大学大学院社会産業理工学研究部 玉真之介教授の報告

玉でございます。ボランティア・パスポートの取り組みについて最初にお話させて頂きます。徳島大学から私、徳島文理大学さんから岡山先生。それから受け入れ側の代表として、徳島市観光協会の花野さんから今回の取り組みの内容を紹介させて頂きます。冒頭で私から全体の概要をお話させて頂きます。

ボランティア・パスポートの趣旨

ボランティアについて、日本の場合はどうも課外活動という位置付けになっていまして、大学の教育の成果とは別というのが一般的です。しかしこのボランティア活動から学べることは非常に多く、学生の成長

グラム、インターンシップについても沢山実施しているのですが、他のプログラムとの差別化、セグメントをしっかりと図っていきたくと思っています。

また、今回7団体様にご協力頂きました。大変ご苦勞を頂きましたが、このインターンシップの効果に対する地域の支持や理解をしっかりと作っていきたくに思っています。イノベーション人材育成というからには我々がまずイノベーターにならなければならないと思っております。精一杯励みますのでご指導ご助言の程よろしくお願いたします。ありがとうございました。

にも大きく繋がります。アメリカにおいてはサービラーニングという言葉を用いて、正課の中で積極的に取り入れられています。しかもそれは小中高大ずっと一貫してのことです。日本の場合は知識中心の大学教育という伝統がありまして、その壁が崩れていない。これを何とか壊したいという思いで、やはり責任のある市民を育成する上で効果のある教育科目としてボランティア・パスポートを、単位を修得する正規の科目として導入しました。徳島県の総合大学校様のご理解とご協力があったことです。

学生自身はボランティアをやりたい、あるいはしなければ駄目だという意識はあるのですが、なかなか行動に踏み出せない。それを正規の単位という事でインセンティブを付け、学生に機会を提供することがこの科目の趣旨となります。2単位の授業科目の中で、最初に教室で適切な知識をしっかりと指導し、同

時にどうすればボランティア活動を探して、行動に移せるかまで伝える。そして、実際に行動するところも1回2回実践する。このような中で、ボランティア先を見つけ、自発的に参加することができるように指導していきます。

その場合に目標値として、スタンプを40個集める。40時間のボランティア活動参加という事なのですが、明確な目標を提示して達成度を自分自身で振り返ってもらう。さらにレポートを課すことで授業科目の教育効果を確認していく、このような仕組みになっています。運営については徳島県と強く連携しており、徳島県民プラザにおいて、様々なボランティアお試体験という募集をして頂いております。このように、学生にボランティア先のリストを提供したり、あるいは学生自身にこのホームページを定期的にチェックする事を授業の中で指導して、彼ら自身が自分の都合を考えつつ、自分の関心に合う内容のボランティアを見つけ出し、募集されている連絡先に自分で電話をかける。最近はメールで様々なことが済む様になっていますので、電話というのは若干ハードルがあるのですが、まずは連絡を取って参加のための調整をし、当日出向っていく。そのような仕組みになっています。

普通の授業が15回ですけれども、そのうちの半分は座学で学び、そして後半は夏休みの時間を利用して、自ラ行き先を探して様々なボランティアの実践を行います。これを一昨年は試してやりまして、本年度から徳島大学における正式な教養教育科目として取り入れられました。更に、今年は徳島大学のみならず、徳島文理大学様と2大学で取り組んでおります。

ボランティアを継続するための工夫

学生は単位を修得するという形でボランティアを体験するのですが、私達の希望としてはそこで終わるのではなく、そこでの体験を踏まえて自主的にどんどんボランティアを続けて欲しい。そうすると授業が終わった後のフォローアップが必要になってきます。彼らにモチベーションを維持してもらうために、パスポートのランクが上がる工夫を行いました(写真①)。まずは緑のパスポート。このスタンプを集めることが授業科目の2単位になります。これを修了した学生に対しては赤のパスポートを配布します。

赤のパスポートは、既に授業で自分達が体験して仕組みが分かっていますので、その経験に基づいて引き続き、自主的にボランティアを探し、ボランティアを見つけ、自分の都合に合わせてボランティア活動をし、その都度スタンプを押してもらうという一連の流れを



写真①

続けてもらう。同じく40スタンプ溜めるところまで彼らに実践してもらって、スタンプが溜まりましたら、振り返りのレポートと共に大学へ提出する。そうすると学長からの修了証が授与されます。これは正規の科目ではなく課外の教育になりますが、赤のパスポートで更に継続してもらう。さらに、赤のパスポートも修了した学生に対しては青のパスポートを配布します。青のパスポートも同じように続けていってそして40スタンプを溜めて修了した場合には知事から表彰して頂く。モチベーションを維持していくためにこのような仕組みを取り入れました。

ボランティアからの学び

本年度徳島大学では120名程授業登録しましたが、実践で脱落した学生もあり、結果的には102名が修了しました。レポートを見ると、ボランティアというのは彼らにとってみると結構大変なのですね。社会に出るという経験が本当に少ないですから。想定外のことが起こった経験や、怒られた経験など、そういう中で彼ら自身は学んでいく。法被を売るのに苦労したとか、後ほど紹介して頂く阿波踊りのボランティアですね。しかし、自分が誰かの助けになっているというボランティア活動の持つ意味は、自分が生きていく上での価値観といったものに繋がるのではないかと思います。

徳島文理大学

岡山千賀子准教授の報告

徳島文理大学での取り組み

徳島文理大学の岡山と申します。よろしくお願いたします。今玉先生からお話がありました様に、本年度から取り入れましたボランティア・パスポートの現状についてご報告いたします。初めての取り組みということで、講座開講にあたり、徳島県立総合大学校関係の皆様をは

じめ徳島大学の玉先生には、多々ご指導賜りありがとうございました。

前期に開講の一般総合科目のボランティアという形で、水曜日の5校時目に授業を設定しました。徳島大学と同様に、前期の15コマ中の前半が座学、オリエンテーション活動報告会を含めて9コマの講義形式を取らせて頂きました。残り22時間以上のボランティア参加と設定しまして、お試ボランティアでは、動物愛護フェスタや大学周辺の清掃ボランティアなどを用意しました。主な活動は徳島大学と同じく、県民活動プラザ、様々な施設、県や市町村関係の企画されたイベントに学生が参加しています。多くの機関の活動に関わらせて頂き、大変ありがたく存じております。

取り組みの成果

2月10日の現在ですが、奇しくも徳島大学と同じ102名の学生、5学科にわたって102名の学生が受講し、緑のパスポートの修了の確定者がそのうち67名です。初年度ですが、予想以上に学生が頑張ってくれて、赤のパスポートへのチャレンジに5名入っております。そして赤のパスポートも終わった学生が3名おり、この3名は青のパスポートにチャレンジ中です。1年間でここまでの学生が出るのは本当に予想以上の結果でした。

講義終了後、教務学生部の方々と連携を取りつつ進めていたのですが、以前からもボランティアの参加は促していたのですが、ボランティア・パスポート制度を始めて学生がより積極的にボランティアに関わるようになりました。緑のパスポートが終わったら赤のパスポートにいくという目標がありましたので、個々の学生が自分で目標設定して取り組んでいる所に大きな効果があったと思います。本学でもレポートを学生の方に提出して頂きますが、参加への意欲や参加後の充実感を表す言葉がたくさん現れていました。前半の授業でボランティアについてきちんと学んだことで、何となくの参加ではなくしっかりと前向きな参加につながったかと思えます。

最後に活動の報告会を行いました。ここからは他の人の活動の報告を聞いて、自分ももっと頑張ろう、あるいは自分の行動の活動のフィードバックが得られたという声が出ています。ボランティア活動を通して見られた学生の成長としては、例えばボランティア先との交渉について、あるいはそこでの対人関係について、スキルのアップを一生懸命頑張っているような状況が見られました。学外での活動は学生の社会性の向上、成長に凄く意味があるものです。

さらに、授業以外でボランティアに対しての相談、あるいは援助を行う事で、学生と教員の間の関係が深まっています。また、大学と多くの関係機関との関わりが深まり、ボランティアの幅が広がりました。

来年度の課題と展望

今年は初年度という事で、私自身戸惑う事が多かったのですが1年経って何とか体制を整える事が出来たので、来年度更に広げていきたいと思っています。また、来年度は全国盲人福祉大会への参加を大学から依頼されておりますので、点字の指導も含めてボランティアの幅が更に広がっていく予定です。学生からも、点字とか手話の勉強をしたいという声がよく挙がっています。

授業の後の活動報告会、更に充実させてしっかりと振り返りをする事。それからボランティアへの活動の事後指導も含めて、きちんと行っていきたいと考えています。更にボランティア活動への参加に対しての、相談も強化をしていって担任やチューターとの関わりを進めていきたいと思えます。また、先程5学科の学生が今年度参加したと申し上げましたが、それぞれの学科の長がありますので、その学科の長を生かせるようなボランティア参加という事も進めていきたいと考えています。以上です。ありがとうございます。

徳島市観光協会事務局長

花野賀鳳様の報告

ボランティア募集のきっかけ

徳島市観光協会の花野と申します。長時間にわたってお疲れと思うのですがお耳の方だけ少しお願いたします。阿波踊りとボランティアという事で去年のご報告をさせていただきます。皆さんお手元の資料をご覧ください(写真①)。昨年の徳島阿波踊りの実績ですが4日間で123万人です。これは私共も自負しております。

過去10年間の阿波おどり期間中の人出数

年	12日		13日		14日		15日		合計						
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外					
H19	18	23	41	17	20	37	16	15	31	17	13	30	88	71	139
H20	18	21	39	16	18	34	16	13	29	17	14	31	87	68	133
H21	17	19	36	16	20	36	14	20	34	16	14	30	83	73	136
H22	17	19	36	16	18	36	18	19	37	16	10	26	80	68	135
H23	18	19	37	18	18	36	17	15	32	14	12	26	87	64	131
H24	17	17	34	14	14	28	17	15	32	15	12	27	83	59	122
H25	17	18	35	15	15	30	16	14	30	15	13	28	83	60	123
H26	15	17	32	15	15	30	14	12	26	14	12	26	58	58	114
H27	16	18	34	14	14	28	15	14	29	17	15	32	82	61	123
H28	16	19	35	15	15	30	15	13	28	17	13	30	83	60	123

写真①

すが、徳島での1番での観光資源ではないかと思っております。

今回は、阿波踊りにボランティアとして参加頂きましたが、まず依頼のきっかけについてお話をさせていただきます。私は一昨年の7月から徳島市観光協会の方にお世話になっています。それまでは旅行会社にて、修学旅行などで全国を回っていたのですが、自分が徳島出身でありながら、阿波踊りの時期は夏の甲子園や各クラブ等の遠征で忙しく、阿波踊りといってもピンと来なかった部分がありました。それが現在は観光協会でお話を聞いて調整や様々な交渉も含めて各連と関わり、またチケット販売などもさせて頂いております。

運営については、これまではお金を払ってバイトの方を雇って行ってきたというのが阿波踊りの現実でした。ところが、東京高円寺阿波踊り、阿波踊りは東京の高円寺でも実施されており、2日間で100万人の動員があります。私、視察に行ってきたのですが、運営について約400名のボランティアの方に2日間ともご協力を頂いていると聞きました。ボランティアも当初はいろいろな背景のスタッフが行っていた運営を、徳島県出身の上智大学、早稲田大学の生徒さんが中心になってボランティア活動を始めたのがきっかけとのことでした。驚いたのが毎年1回生から4回生の子が、1回目やってくれたら卒業までボランティアを行なっている。今年チーフになったボランティアの子が卒業したと思ったら、来年にはまたチーフの子が育っているのです。

これを徳島に置き換えて、徳島の阿波踊りについて残念に思っていたところ、たまたま総合大学校、また玉先生のご紹介もあり、昨年はボランティアに参加してもらいました。地元観光資源であります阿波踊りを、ただお金を払ったアルバイトを雇って運営するのではなく、地域の皆さんまた地元の若い学生の皆さんの協力を頂いて、本当に世界に誇れる阿波踊りにしていきたいという思いがあります。私がある間に本当に皆で阿波踊りを盛り上げていきたい、阿波踊りを変えてい

きたいと考えています。

ボランティア活動受け入れの成果と課題

昨年のボランティアの参加数が出ていますが、ボランティア・パスポートの関係もありまして、徳島大学63名、これにはインターンシップとしての参加者4名も含まれます。徳島文理大学の学生さん16名、全体で212名の参加がありました。徳島文理大学には中国・韓国の学生さんにも、駅前の総合案内所で海外の語学案内業務を手伝って頂きました。

ボランティアの皆さんには、事前の阿波踊りの出演順の抽選会から始まり、本番の4日間の各会場に分かれて活動して頂きました。アスティとくしまでの前夜祭では会場の案内、内枠割りなど、あわぎんホールも同様ですね。先程玉先生も仰っていましたが、有料演舞場では怒られたボランティアの子もいました。反対にありがとうございますと言ってもらえた学生さんもたくさんおりました。

今年の活動を振り返って今後の課題なのですが、私共も昨年初めてボランティアを受け入れまして、学生さんに何時に来てとかこういう事をして欲しいとか、十分な準備が出来ていませんでした。こちら連絡出来ていなかったのですが学生の身だしなみが短パンTシャツであったり、茶髪の生徒さんがいらっちゃって、果たして前に出しているのか色々迷ったりもしました。また、阿波踊りの時間帯が夜遅くまでのあることもボランティアの参加を難しくしているかもしれません。今回の反省も踏まえて今後の課題としまして、各大学と連携を取りながら、ボランティア受け入れについてもチームづくりを行い、伝達がちゃんと出来るようにスタッフを教育したいと思います。本当に阿波踊りを盛り上げる為に、ボランティア活動の受け入れをスタッフ全体で進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

第一部 地域との連携事例の報告

報告…2 地域企業と連携したプロジェクトマネジメント教育

徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域講師 日下一也
四国化工機株式会社食品事業生産本部取締役本部長 鶴飼昭仁

徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域 日下一也講師の報告

それでは地域企業と連携したプロジェクトマネジメント教育と題しまして、徳島大学の私日下の方から報告いたします。報告の最後に本事業に協力頂きました四国化工機株式会社の鶴飼様に、企業目から見た本事業に対するコメントを頂戴いたします。最後までよろしくお願いたします。

「プロジェクトマネジメント基礎」という題目の授業ですが、徳島大学の創成学習開発センターで開発しました。創成学習開発センターは、創造、自主、共創この3つのキーワードを基に創成能力の学習法、それから創成能力の評価法などの開発を目標に活動するセンターです(スライド写真①)。そして、ものづく



スライド写真①

りを中心とした学生プロジェクトを支援しながら、創成能力の開発をしていく活動をしています。この学生プロジェクトが成功するか失敗するかはプロジェクトマネジメントに大きく関わっているということが分かりました。そこで我々はプロジェクトマネジメントをしっかりと学生に教育するための取り組みを進めてきました。そして、センターの設立から10年経ちます2013年に、プロジェクトに関わっている学生以外の一般の学生にもプロジェクトマネジメントを教えるプ

ログラムとして開講したのが、「プロジェクトマネジメント基礎」です。

本授業を受けると、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力といった社会人基礎力、それからプロジェクトマネジメント能力が身につくように設計しております。2015年度は約70名、2016年度は約90名の学生が受講しました。工学部の全学科、建設、機械、化学、生物、など様々な専門の学生が1つのグループとなって1つの課題を解決する仕組みです。1つのグループが5名から6名で実施しています。

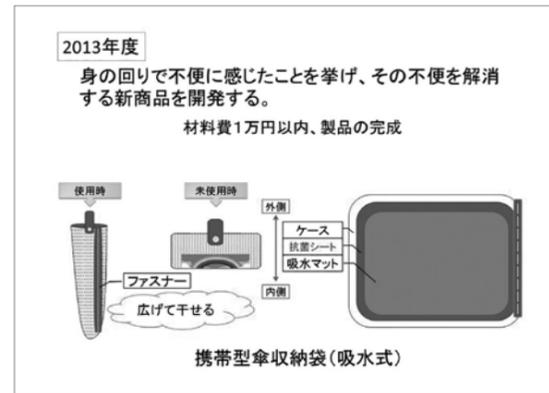
授業内容ですが、最初にキックオフミーティングを行い、どのような課題に対してどのような方向から解決するかという自分達のプロジェクトの目標を決めます。その後それを達成するために企画を設計し、企画を他グループとも討論しながらブラッシュアップし、最後に皆の前で発表するという流れです(スライド写真②)。



スライド写真②

「プロジェクトマネジメント基礎」で取り組んだ課題
2013年度、最初の授業では「身の回りで不便に感じたことを挙げ、その不便を解消する新商品を開発する」というテーマで、実際にプロトタイプまで作ろうという課題で実施しました。そして、材料費として1万円を支給し、それ以内で製品を完成させます。一例ですが、携帯型の傘収納袋は、広げると傘をいれることができ、雨に濡れた傘をさしておくとう授業が終わったところには濡れた傘がきれいに乾いているという袋で

す。中身は吸水マットと抗菌シートを入れた布ですがこういったものを作ったチームがありました(スライド写真③)。



スライド写真③

ここで分かったのが、いきなりものを作る課題を出してしまうと、企画が間に合わない、企画に時間がかかってしまって、ものづくりをする時間が非常に短くなる、酷いケースでは発注して授業が終わった後にもものが届く、という事態になりました。実際にものをつくるというのは大変だということで次の年からは企画案に絞ってしっかり練ったものを作成し、発表する流れに変えました。

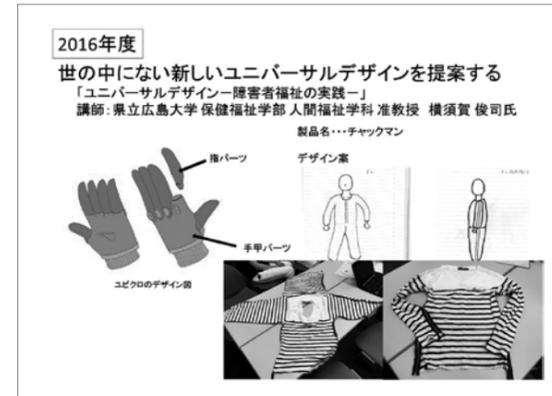
2014年度は「徳島県の要望を解決するための企画を設計する」という趣旨で、2つのテーマを挙げて学生に取り組みせました。1つは「鳥獣被害を防ぎつつ共存出来る環境をつくる」、もう一つは「糖尿病を治す街、糖尿病を意識せずに忘れられる街の創造を目指す」と、このようなテーマです。そして現在課題となっている問題点を説明して頂くために、鳥獣被害については徳島県の県民環境部の土井様、街づくりに関しては四国大学の福島先生をお招きし、課題の背景について講演を頂きました。

出て来た学生の企画としては、鳥獣被害と農林業とのテーマでは例えば山の周りに壁を作るという、どこかの大統領が言っていたようなアイデアとか、あるいは徳島の動物園から猛獣の糞を集めてきてペットボトルに入れて吊すことによって、草食動物が嫌がって寄り付かないのではないかと、そういったアイデアが出てきました。糖尿病の方では、早目に糖尿病が分かれば早期治療につながるという視点から、糖尿病を含む生活習慣病の検査にかかる値段が6,100円と高額であることに着目して、糖尿病に絞って安く受けられる検査を開発するという提案がありました。

2015年度についても2つのテーマを用意しました。1つは「徳島県の人口減少問題に歯止めをかける」、もう1つは「おからの有効利用を考える」。人口減少

問題については、国立社会保険人口問題研究所の室長だった佐々井先生、今は福井大学におられますが、こちらをお招きして日本の人口の減少問題の講演を頂きました。最終的には、徳島県の地域特性を生かして、大自然に囲まれた婚活をプロデュースするというアイデアや、商店街を渋谷や新宿のような街のイメージに変えるといったアイデアが出てきました。おからの再利用については、後でコメントを頂きます四国化工機の鶴飼様をお招きし、課題の背景について講演を頂きました。このテーマの詳細については、後ほどお話しいたします。

本年度2016年度は、「世の中にない新しいユニバーサルデザインを提供する」というテーマで実施しました。ユニバーサルデザインというのは健常者から障害者あるいは子供から大人、お年寄り女性男性関係なく全ての人が便利に使えるものです。授業で出てきたアイデアを2つ紹介します(スライド写真④)。1つは「ユビプロ」という名前の手袋で、手の甲を覆うパーツと



スライド写真④

指を覆うパーツの着脱ができます。人の指というのは人それぞれ長さが違います。そこで、長さが違う指パーツを組み合わせて、自分にぴったりの手袋が出来るということです。さらに、指が欠損した方は不要な指パーツを取り除く、あるいはスマホなどを操作する時には邪魔になる指パーツを取り除く、といった用途が考えられます。もう1つは、チャックマンといいまして、あちこちをチャックで開くことができる洋服です。全てのチャックを開くと一枚の布状になりますので、寝たきりの人の着替えも簡単に出来る、というアイデアです。このチームは実際にプロトタイプを作って発表しました。

地域企業と連携したプログラム

今から地域企業と連携したプロジェクトマネジメント教育ということで、四国化工機株式会社さんと連携

して提供したプログラムの例を紹介させていただきます。授業の最初に四国化工機の鶴飼様から、テーマとなるおからの話を頂きました。実際、学生の中にはおからというものを知らない者もいましたのでおからの紹介から始まり、それから、現在どれくらいのおからが無駄になっているか、おからは水分が含まれていますので賞味期限が短いという話、そこで四国化工機さんは、乾燥させることによって賞味期限を伸ばして無駄をなくす取り組みをすでに行なっている話を頂きました。また、実際に乾燥おからのサンプルを学生に提供して頂きました。そしてその後、受講学生から出てきた質問に対して細かくメールで回答頂きました。企業の取り組みに関連する質問には我々教員は即答することは出来ませんし、学生が自力で調べて結果を得るまでには時間と労力がかかります。その間にモチベーション下がるとプロジェクトが上手くいかないこととなりますので、応答の速さは重要だったと思います。

学生から出てきたこの提案は「おから革命」というタイトルで、おからの廃棄物を直接減らすのではなく、現在四国化工機さんが提供している乾燥おからの販売量を増やすというテーマで取り組んだものです。普段乾燥おからを目にしないう点に着目して、スーパーで実際に見に行ったら乾燥おからは豆腐コーナーに置かれていたことが分かりました。しかし、豆腐と一緒に乾燥おからは買いません。乾燥おからはどうやって使うかという、小麦粉などに混ぜることで食物繊維が摂れて、ダイエット効果になります。とすると粉物のコーナーに置くのが効果的ということになります。彼らは売り場の提案だけではなく四国放送さん、スーパーマーケットのキョーエイさん、それから、四国化工機さんなどの具体的な企業を巻き込んでどのような取り組みができるかまで提案しています。小麦粉と混ぜるのであれば最初から小麦粉と混ぜた商品があっても良いのではないかと提案、更に使い方として料理レシピをポップで表しておくより売れるのではないかと。

これらのアイデア広めるために彼らはボランティアNPOの情報誌に記事を出して広く読んでもらったり(スライド写真⑤)、自ら社会にアピールしたりするという行動まで起こしました。また別のグループですが、



スライド写真⑤

おから料理をフリーズドライにしてレトルト商品にして売る、徳島だったらマチアソビに人がいっぱい集まるので、買ってもらうために外装にアニメキャラをつけて販売促進する、という企画・提案もありました。

企業との連携による教育効果

ここで私達は学生の変化に気がつきました。企業との問題点を解決する課題ですと、これまでのテーマでの学生の意欲が全く異なり、最初から最後まで熱心に取り組んでいました。実際にもらった乾燥おからを使って、実際に何か作ってみようという自発行動を起こしてみたりします。学生が実際に行動するというのが企業と連携した時の1番大きな成果だと思います。

こちらの図は創成学習開発センターで出している学生の能力の評価です。様々な創成能力の項目がありまして、実施前と実施後で学生が自己判断して、どの程度能力が伸びたかというアンケートを実施した結果です。おからの有効利用を課題とした時には、調査する能力、行動する能力、発現する力以外にもアイデアを出す力というのが大きく伸びていることが分かります。今年実施したユニバーサルデザインの課題では、グループ活動をしていますので、協調性の項目は伸びたのですが、期待していたアイデアを出す力、企画する力、調査する力、行動力などはあまり伸びていない。テーマの選び方も重要で、ユニバーサルデザインにはなかなか学生が食いつかなかったのではないかと評価しております。

来年度、また4月から授業が始まりますが、「LEDを用いて世の中にない新しい製品を提案する」というテーマを考えております。毎年異なるテーマを準備していますが、企業や自治体が本当に困っている問題点を提供することによって学生は興味を持ちます。興味を持てばそれだけ教育効果が大きくなります。良いテーマがございましたら、ぜひ我々にテーマを頂戴頂きまして、課題の背景の講演などの面で協力を頂ければと考えております。

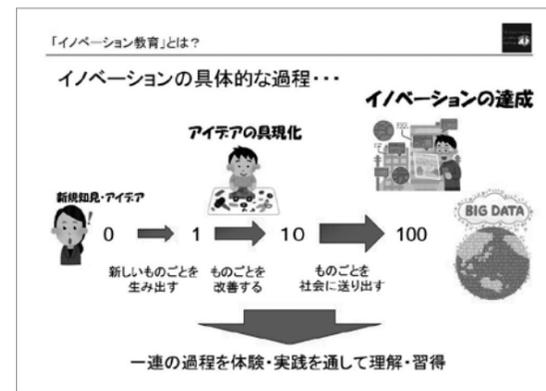
企業から見たプロジェクトマネジメント教育最後に四国化工機の鶴飼様から企業から見た本事業というテーマで、コメントを頂いて終わりにいたします。

四国化工機株式会社食品事業生産本部 取締役本部長 鶴飼 昭仁様の報告

四国化工機食品生産本部の鶴飼と申します。このプ

ログラムに対して感想・コメントということですが、一言でいいますと、今時の学生は凄いなというのが私の個人的な感想です。私は昭和60年、30数年前ですが徳島大学を卒業しました。そのころの学生は何をしていたのかなというのが本音です。このプログラムに参加した学生についても、最初は講演した後に1点2点質問があるかという程度に思っていたのですが、面倒くさいぐらいメールが来て、面倒くさいぐらい電話が来ました。ただ真剣に応えると学生の方も一生懸命考えて次から次へと質問が来ます。実は私の息子も徳島大学に在学中でして、子供のことを考えるとこの学生達を無視出来ないというのが本音のところでしたが、遣り取りをしている彼らが社会に出た場合にはこの前向きな行動が必ずや役に立つと感じました。

当社には機械部門、包装資材部門、食品部門とあるのですが、いずれの部門も基本的には前向きな人間しか欲しくないというのが企業の考えです。当然成績優秀な方も必要ですが、それ以上に前向きな方、そういう方が企業に入れば、必ずや成果を出します。当社では徳島大学の卒業生は4分の1ぐらいおりますが、昔と今の若い社員では考え方が違うなと思うことがあります。それはこのような新しい取り組みがあって変わってきているのかなと、プログラムに参加して感じました。今後このような取り組みをどんどん進めて、学生のレベルを上げて頂き、企業としても優れた学生達をどんどん採用して成長したいと思っております。私から以上でございます。ありがとうございます。



スライド写真①

法について学生達に体験・理解する為のワークショップを2年前から実施しています。

「徳島大学イノベーションチャレンジ」プログラムにおける企業との連携

ワークショップでは、アイデア創出において近年非常に注目されておりますデザイン思考という方法、考え方を取り入れました。客観的な情報ではなく主観から入って、体験から通して問題定義を行い、出てきたアイデアを具体的な形に作り出します。頭で考えるのではなく、実際にものに起こしてみてもテストをするというサイクルを繰り返すというのが、簡単にいえばデザイン思考の枠組みです(スライド写真②)。1年目の取



スライド写真②

り組みで、こちら岡部様に参加して頂き、アプロサイエンス様で取り込もうとされている事業について一緒に取り組んだというのが最初でした。

株式会社アプロサイエンス取締役社長 岡部慎二様の報告

株式会社アプロサイエンスの岡部と申します。よろ

しくお願いいたします。まず徳島における地域の課題は何かといいますと、6次産業化のモデル地域を目指すことだと当社は考えました。一般的な6次産業化のモデルは、1次産業である農家が独りでに2次、3次となっていくようなイメージを持たれています。1人のいわゆる専門の職人の農家さんが加工して、更に販売までいく。このような形ですと、かなりの重労働を行い、かつ売のノウハウがなければなかなか成果に結びつきません。

そこで、我々は加工販売に企業が関わる6次産業化のモデルを提唱しています。1次産業の従事者は同じで、2次の加工販売を当社アプロサイエンスがサポートさせて頂いて一気に進める。その過程で地域と当社の商品をブランド化する。さらに、そのプロセスの中で若い人材の育成を行う。このような若手育成まで含めたプロセスのモデルとして、当社アプロサイエンスと1次産業の従事者が共に徳島大学学生さんを教育する。企業・農家・そして大学の役割を明確にし、それぞれが分担をして効率的に事業を起こしていくことを考えて、プログラムに参加しました。その時に、何を事業テーマとして選んだかという事に関して、少しだけ当社の概略を説明させていただきます。

当社は元々約25年前にタンパク質の分析において、企業の研究者や大学医歯薬系のライフサイエンスを研究している基礎研究をサポートするという事業から始まり、現在まで経営をしております。第3回の徳島ニュービジネス大賞でも受賞を頂くなど、バイオサイエンスの高い技術を持っております。そこで、バイオサイエンスの分析技術と1次産業、徳島県海陽町の農法にこだわったお米、漢方栽培米の栽培技術をドッキングさせ、独自の化粧品の原料開発に取り組んできました。販路としては、今市場で急速に発達しているインターネットの通販事業を中心とし、地域の材料と我々の技術を使って新しい収益源を狙い、多角化を図っています。そのような中で、今回イノベーション教育と合わせて事業を推進する事を決めました。

やはり企業ですので収益をどの様に上げるかが課題になります。継続した新規のお客様の獲得、1人の顧客をいくつで獲得するというCPO(注文獲得単価)、いわゆるコストパフォーマンスで1人あたりの顧客獲得コストをいかに下げるか。さらに、1年間の顧客の単価をどの様に上げるかという、LTV(顧客生涯価値)という指標があります。CPOをいかに下げて、LTVをいかに上げるか。この2つを指標として現在事業に取り組んでいます。LTVを上げるためにはお客様とのコミュニケーションツールが重要になります。そこで今回は、いかにお客様とコミュニケーション

第二部	地域との連携事例の報告
報告... 3	<h2>県内企業・農家との連携による新規事業モデルの検討を通じたイノベーション教育の実践</h2>
	<p>徳島大学教養教育院イノベーション教育分野講師 北岡和義 株式会社アプロサイエンス取締役社長 岡部慎二</p>

徳島大学教養教育院イノベーション教育分野 北岡和義講師の報告

徳島大学教養教育院イノベーション教育分野の北岡と申します。今回はアプロサイエンス取締役社長の岡部様と共同して取り組んでいる、「県内企業・農家との連携による新規事業モデルの検討を通じたイノベーション教育の実践」についてお話させていただきます。

イノベーション教育へのアプローチ

先程私はイノベーション教育分野の教員と申しましたが、今の立場になりましたのは2年前です。そこでそもそもイノベーション教育自体があまりメジャーではない中で、どのような事を教えていけばいいのかとはじめに考えました。

イノベーションの具体的過程に対する考え方として、今あるものを組み合わせる全く新しいものを生み出す、これがいわゆるイノベーションといわれるプロ

セスです。0から1を生み出すなどと言いますが、しかし、それだけでは不十分です。出てきたばかりのアイデアの時点では世に出していきけるようなものではありません。アイデアを世に出せるものにする為には様々なブラッシュアップを行い、良いものにする、改善するという作業が必要になります。このようにして、10に育てたアイデアですが、実際に社会で流通させるにはさらに売り出す送り出すためのプロセスが必要になります。そうする事によって100まで育つ。そして育ったものが実際に、世界を変えていく。これこそがイノベーションであるという風に私自身は考えております(スライド写真①)。

ですから、イノベーション教育というのは、このイノベーションの過程を体験・実践を通して理解・習得してもらうことで、社会に出た時にイノベーションを起こせる人材に育つ。このような狙いを考える様になりました。そこで私がはじめに取り組んだのは、アイデア創出の部分です。「徳島大学イノベーションチャレンジ」と名前をつけましたが、新規アイデアの創出

るリターン商品を入念に検討しました。同時にクラウドファンディングの特性として、2ヶ月のうちで最初の1週間が勝負だといわれていますので、立ち上がりを意識した広報活動を展開しました。この様にして目標金額を約1ヶ月で、最終的には90万円突破という事で達成率150%を越える成果を上げる事に成功しました。

あくまでこれは通過点でして、これからどの様にして販路を確保していくかを考えていきます。現在、備蓄パン、海陽町の米ぬかを使った3年間腐らないパンの試作段階までできております。資金が集まりましたのでこれから製造に繋いでいく予定です。

(北岡) ここで、ついでに徳島大学が立ち上げたクラウドファンディングサイト、Otsucleの簡単な説明をさせていただきます。基本的に支援をいただくにはなかなか難しい仕組みでして、支援したいなと思ってもすぐに購入する事は出来ず、一旦会員登録をした上で支援をするという手続きになっております。ですので、クラウドファンディング全般がそうなのですが、軽い共感「あ、いいなあ」というだけではなかなか支援には結びつかない。いかに強く支援してあげたいと思っ頂けるかが重要になります。もし皆さんの中で取り組みたいプロジェクトをお持ちの方がいらっしゃれば、Otsucleのホームページを介して支援を募ることが出来ますので、よろしくお願いいたします。

イノベーション教育の今後の展望

最後に、イノベーション教育の今後の展望としては、アイデア創出の段階からイノベーションにつなげていかねばならない。本当のイノベーションに到達する為には様々な障壁が存在するといわれています。大きくは3つあるだろうといわれていますが、1つ目は新規アイデアを産む時の障壁。魔の川といわれているもの。2つ目は新規アイデアが出来たが、それを社会で実現する為の資金調達や製品化の難しさ。死の谷と言われております。最後に、実際のものが出来たとしても過当競争の中で生き残る難しさ。ダーウィンの海です。この様な大きな障壁があるが、それを乗り越えて世の中を変えるのがイノベーションであるといわれています。「イノベーションチャレンジ」の取り組みを、多くの学生に参画してもらいながら継続させ、真のイノベーションに向かう過程を学生と共に経験していく場にしたいと思っております。

必ず来るといわれている徳島における災害用の備蓄、最後にこのプロジェクトの骨である教育、学生が中心となった活動の形ということですね。この4点です。そして、収益性としてニーズ、商品化、今回クラウドファンディングを利用するという事で、その為の広告の宣伝力、そもそも商品としての売上高、原価、経費、この辺を最適化していく事を基本形として設計しました。次の段階として自分達が考えた社会貢献性に対して、実際対価を払って購入頂けるかというストーリーの持つ力や、オリジナリティ、そして材料を検証しました。最終的には活動をどの様にして広げるかという拡散性の検証です。このような形で、現時点でも更にブラッシュアップしており、これから商売として利益を上げていく為の事業計画を考えていきます。

クラウドファンディングを通じた資金調達への挑戦

現実にもどのように事業を進めていくかについては、今回は徳島大学が運営するOtsucleというクラウドファンディングサイトを通じた資金調達にチャレンジしました。その時に我々が大事にした事は、社会貢献性とビジネスを両立させることでした。売れる仕組みをつくっていく中の核に必ず教育を組み込む事を軸にプランを立ち上げ、資金調達の提案を作成しました。その結果、スタートして2ヶ月の期間が資金調達の期限ですが、結果として1ヶ月で目標金額を達成しました。

これがクラウドファンディングOtsucleの購入画面です(写真)。画面の右側に目標金額とありまして、最



写真

初の目標金額は50万円に設定しました。下には何故我々がこのプロジェクトをしなければならないかという、共感性のストーリーを書いてあります。この文章の構成や、2000円の商品を買って頂くことで得られ

の活動の中心は週1回のペースでの定期ミーティングでした。通常のミーティングに加えて、米ぬか活用のアイデアとして出てきたパン作りに対し、実際にパンを作ってみるとか、パンを製品化するためのラベルを考えると、具体的な事業モデルを考えると、様々なワークを実施しました。この様なワークでの検討結果をベースとして、学生が中心になって徳島県が主宰するビジネスコンテスト「とくしま創成アワード」に挑戦しました。残念ながら賞には選ばれませんでしたけれども、このような挑戦自体に教育的効果があったのではないかと考えております。

さて、最終的な事業アイデアは、備蓄パンを用いた教育コンテンツとなりました。3年備蓄可能な備蓄パンに、海陽町の漢方栽培米の米ぬかを配合する。これを地域の学校に教育教材として買ってもらおうというものです。災害が発生した際にはこれを災害地に対して食糧支援を行う。2年間使われなかった際にはNGOを介して世界の貧困地域等に食糧支援として送る。実際にこういう取り組みを行なっているNGOも存在します。そしてこの備蓄パンによってお腹いっぱいになった方々と国際交流、漢方栽培米を取り組みと関係しておりますので、農業体験実習を通じた交流が出来るのではないかと。これらを総合して、防災教育、災害支援、国際教育、国際支援、農業教育、職業教育全てを併せ持った、将来の徳島と世界10億人の課題を解決するきっかけとなる教育コンテンツが出来るのではないかと。これが彼らがつくったモデルになります。

アイデア実現に向けてのステップ

(岡部) ここまでプランがまとまってきた段階で今後どのような形を目指していくのか、ビジョンを明確にするという事で、取り組みの方針をもう一度整理をしました。ファーストステップとしては、ビジネスの基本形をしっかりと考える。それが出来た段階で、具体的なビジネスとして成り立つかどうかを検討する。このような二段階のステップで考えました。各段階においては、社会貢献性と収益性の2軸で考えを進めました。社会貢献性については、社会からの共感をどの様に得るかの基本形を考え、次に共感を得られるストーリーが構築できているかをチェックする。収益性については、商品自体のニーズ調査や販売の可能性を考え、その後に社会貢献性のストーリーも踏まえて、それが収益の上がるビジネスとして本当に成り立つものかを検討しました。

ファーストステップの社会貢献性として我々が掲げたのが、国際貢献、地域貢献、この南海トラフ地震が

ンを図るかという流れにおいて、直接化粧品を売るのではなく、背景としての地域との取り組みをお客様に伝えることを徳島大学さんとの協働プログラムのテーマに選びました。

もう一度整理させていただきます。海陽町の農家の方から頂いた化粧品の原料をアプロサイエンスが加工して商品を作り、アプロサイエンスが広告宣伝をネット上でを行い、顧客に商品を買って頂く。これで売り上げの収益が立ちます。同時に顧客とのコミュニケーションを取るために、事業の背景を伝えたい。そこで、徳島県と共同研究契約を結びまして、海陽町の課題の研究、そしてお米自体のブランディングを町と共に実施する。上がった当社の売り上げは、海陽町の農家にインセンティブとして還元するという形の協働をやってきました。

さらに、徳島大学と協働した教育の一環としても取り組み、学生が参加するプロジェクトを設けたいという事で、今回一般社団法人大学支援機構様の運営するクラウドファンディングに登録し、一般の方に先程のモデルを提唱する事によって出資を頂くことで、学生と協働するプロジェクトを立ち上げました。

プロジェクトへの学生の関わり方

(北岡) アプロサイエンス様からこの様な話を頂き、先程の話にありました1から100までの一貫したイノベーション教育の機会となるのではないかと、協働で取り組む検討を行いました。しかし、将来の事業化収益化というのを確実に見込んだ上での教育を、産学連携のどのような枠組みで進めるのが課題となりました。大学の産学連携・研究推進課に相談すると、学内に先事例がない。ではどの様に進めるのか、細かい話が色々あったのですが、最終的には先程お話し頂いた様な共同研究契約、研究という枠組みで、私北岡とアプロサイエンスとの間で契約を結び、将来的に実際に事業化等が起こった際は別途自主契約を結んだ上で進めるという枠組みとしました。

その上でイノベーションチャレンジ内のプロジェクトとして、現役学生3名、OB1名、合計4名が参加してプロジェクトを開始しました。はじめに、海陽町で漢方栽培米を扱う農家さんとは一体どういうところか、どのような考えを持たれているのかを取材するため、漢方栽培をつくられている多良稲作研究会に出向きまして、勉強会、田植え、稲刈り体験など計3回のフィールドワークを実施し、学生、メンバーに農業とその抱える問題の共有をしてもらいました。

もちろんフィールドワークだけでは不十分で、実際

四国大学短期大学部教授 植田和美

四国大学短期大学部の植田和美と申します。本日は食物栄養専攻における地域連携の取り組みというテーマで報告をさせていただきます。短期大学部にあります一専攻が取り組んでいる事例ですので今まで発表された方と少し違うかとは思いますがお聞き下さい。

食物栄養専攻における地域連携教育の枠組み

食物栄養専攻における取り組みという事ですので、はじめに食物栄養専攻についてご説明いたします。スライドは本学ホームページの食物栄養専攻の最初のページです(スライド写真①)が、本専攻は栄養士の養



スライド写真①

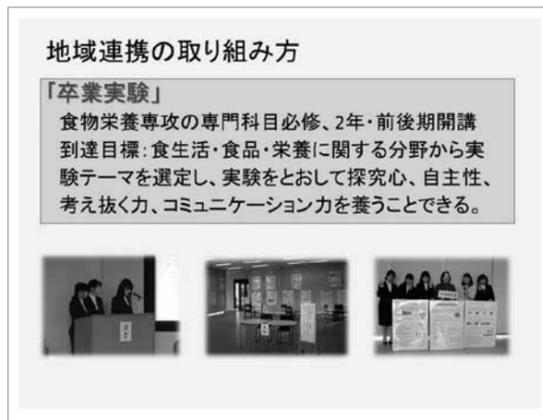
成に加え、食品関連企業で活躍できる人材を養成しています。また、2年前から食品衛生管理者および食品衛生監視員の資格が取れるようになっております。こういった学生がどのような勉強をしているかご理解頂けると思います。さらに専攻の特長として、卒業実験という専門科目がございますが、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、社会人としての基礎力を養う目的で開講している科目です。本専攻での地域連携について、平成26年度から28年度に実施した取り組みを紹介いたします(スライド写真②)。ただ、このような取り組みは学内で色々な先生が、同じ食物栄養専攻の中でも複数の先生がそれぞれの分



スライド写真②

野、立場で行なっています。ここに挙げましたのは植田が関わり、学生も参加した取り組みです。取り組みの中には、こちらからお願いしたケースや、地域から依頼があって取り組みを始めたケースなど、様々な形があります。それでは、具体的にどのような地域連携を行なっているかを報告いたします。

私の場合は大きく2つの方法で地域連携の取り組みをしています。1つ目は、先ほど述べました卒業実験の中で地域連携を進めています。この卒業実験というのは食物栄養専攻の専門科目、必修科目であり、2年生の前期・後期の通年で開講しています(スライド写真③)。いわゆる4年制で実施されている卒業論文の



スライド写真③

ような事を短期大学部で行っております。学生は自分が設定したテーマについて、1年間を通して研究活動を行い、最終的に口頭発表と作成したポスターの展示を行うという流れです。

2つ目は、「食栄ふあくとりー」を活用して地域連携を進めております。この「食栄ふあくとりー」は、食物栄養専攻の学生が食育や地域連携など学外での自主的な活動をする時に使うグループの名称です。平成26年に結成され、食物栄養専攻の学生全員がメンバーになっています。活動ごとに参加者を募ってそれぞれの活動を行い、地域連携だけではなく葉酸たまご甲子園やチャレンジ糖尿病レシピコンテストといった色々なコンテストなどにも応募しています(スライド写真④)。



スライド写真④

また、徳島の情報サイトまいぶれ徳島にレシピ開発や提案するという活動も行いました。

正課科目「卒業実験」を活用した地域連携教育の事例

ご紹介した2つの地域連携の取り組みについて、それぞれ実際にどのように進めていったか報告します。事例の1つ目として卒業実験の中で「木屋平の産物を使ったスイーツ作り」というテーマで地域連携に取り組みました。連携の背景として、美馬市の社会福祉協議会の第2次地域福祉活動計画の中で、木屋平地区の「教育と地域産業」が課題となっていました(スライド写真⑤)。仕事がなく若者が定住しないため子供がおらず、子供を産み育て生活できる環境がないという課題を抱えている地域です。それに対して働ける場所を確保したい、6次産業化を検討したいという動きがあり、具体的な活動計画として木屋平の産物を使ったスイーツ作りを美馬市の社会福祉協議会が進めることになりました。そこで、地域連携活動として食物栄

事例1「木屋平の産物を使ったスイーツ作り」

美馬市社会福祉協議会 第2次地域福祉活動計画 (平成25年度~平成29年度)

美馬市木屋平地区「教育と地域産業」

課題

- ・仕事がなく若者が定住しないため子どももいない
- ・子どもを産み育て生活できる環境がない

どうする(具体的行動)

- ・働ける場所の確保
 - ・6次産業化の検討
- 「木屋平の産物を使ったスイーツ作り」

スライド写真⑤

養専攻が取り組むことになりました。

本学には徳島県西部と徳島県南部にスーパーサテライトオフィス(SSO)がありますが、平成27年2月に西部地区SSOの徳山コーディネーターから取り組みの背景と課題について連絡を頂きました。そこで、3月に実際にどのような産物があるか、地元の方はどのような事を考えているかを調べるため、木屋平地区で現地調査を行いました。この段階ではまだ学生の参加はなく、教員が現地にお伺いして調査を実施しました。その後、3月24日に木屋平地区で現地交流会を開く事になり、そこに向けてどのような産物を使ってどのような提案ができるか検討をしました。平成27年4月以降に卒業実験で配属される食物栄養専攻の学生4名が決まっていたので、その学生たちにも相談しながらゆずの使用を決定しました。徳島のゆずとしては、とりわけ木頭のゆずは有名ですが、木屋平地区のゆずも有機JASの認定を受けているという特徴があります。

ゆず玉の加工は、ゆず酢にするのがほとんどで、皮は廃棄されているということを現地調査の時に聞いたことで、ゆずの皮を使って何かスイーツを作ろうという事になりました。特に4名の学生の中の1人がゆずのスイーツ作りに大変興味を持ち、卒業実験のテーマとして取り組む形になりました。

そうして平成27年度の卒業実験がはじまりました。現地交流会の時に4種類のスイーツを試作し提案しましたが、どれも良い評価が得られました。地域から明確にこれに取り組んで欲しいという話はなかったのですが、先程の担当学生からの希望がありましてパウンドケーキ作りを卒業実験の中で進めていく事になりました。

使用する材料は出来るだけ木屋平地区のものを使用しました。まず有機JASの認定を受けたゆず、ゆず酢、ゆずの皮を使います。さらに木屋平地区では放し飼いの

で養鶏を行っており、高原たまごという地域の特産物があるので、これも使用しました。他の材料も出来るだけ国内産のものを使用しました。それと学生の強い希望があり、砂糖を上白糖ではなく和三盆糖を使いました。できるだけ添加物は使いたくないという事でベーキングパウダーは使用しませんでした。卒業実験の中で、卵白の気泡性を実験していたら、高原たまごの気泡性が優れていたのので、そういったことも利用して作り方を工夫しました。週1回の卒業実験の授業の中で検討を進めるとともに、木屋平地区においても様々な地域交流を行いました。

9月3日にはいきいきサロン大交流会に参加しました。ここでは3種類の配合を変えたゆずパウンドケーキを持ち込んで試食会を実施し、官能評価をしてもらいました。11月4日にはゆずの収穫体験をさせていただきましたが、なかなかゆずの収穫を体験出来る機会はないので学生に参加してもらいました。学生も楽しんでおり、収穫後の交流会では地元の郷土料理も振る舞って頂きました。12月22日には最終的に決まったレシピを使ったパウンドケーキを木屋平地区に持ち込み、試食会と同時に担当した学生によるスイーツ開発の報告会を行いました。このような流れで平成27年度の卒業実験の中で地域連携を行いました。平成28年度に入りまして、地元の方からイベントでの試験販売にゆずパウンドケーキを作りたいという話を頂き、担当した学生は卒業しておりましたので教員が作り方の指導をするという形で成果を還元しました。このような形で結果が見えてくると、地域連携に関わった者としては大変嬉しいというのが本音です。

自主活動「食栄ふあくとりー」を活用した地域連携教育の事例

もう1つの事例ですが、「食栄ふあくとりー」で取り扱ったテーマ「美波町のひじきを使ったパン作り」の取り組みです。これは平成26年度の美波町、道の駅日和佐の活性化プランの提案募集から始まりました。道の駅日和佐の活性化や地域色あふれる商品の開発に繋げることが課題でした。美波町の特産物が何であるのかを検討する、もしくは商品を提案して欲しいという課題があり、大学に美波町の特産物を使った商品開発をして欲しいという依頼がありました。

取り組みの進め方をお話します。平成27年4月に、南部地区SSOの久米コーディネーターから依頼についての話があり、その後、食物栄養専攻としてお話を頂きましたので、4月30日に本学と南部のSSOを繋いで第1回の打ち合わせをしました。その後、商品や

販売の実態を見る必要があるという事で、7月に専攻の教員2名が現地視察と現地でのミーティングに参加しました。そのミーティングの時に、道の駅日和佐の方から、産物の中でも「ひじき」を使ったもの、例えばパンはどうかという提案を受けました。私が食品加工学を担当している事もありまして、ひじきを使ったパン作りを検討する事になりました。

年度の途中での依頼でしたので、本当は卒業実験で取り扱った方がスムーズに色々な検討ができるのですが、時期を考慮しまして「食栄ふあくとりー」で取り組むという事にしました。平成27年度から平成28年度にかけて取り組みとなりました。平成27年度は年度途中から始まり、2年生は既に卒業実験で色々な取り組みをしていましたので、1年生の参加を呼びかけたところ、10人程が手を挙げました。その10人で集まり、パンレシピの考案、試作、改良を行っていききました。

しかし、手を挙げてくれた10人は同じ専攻でも取得を希望する資格・免許によって授業が違うのでなかなか空き時間が調整しにくく、できるだけ参加者が多い日を選んで実施しました。そして、一応提案できるパン4種類が決まりましたので、第1回の試食会を10月16日に本学で開催しました。美波町・道の駅日和佐からの参加者の皆さんからも色々な意見を頂きました。さらに検討を進め、第2回の試食会を本学で11月24日に行いました。そして、12月13日に開催された美波町の商工祭においてひじきパンの試食会を行い、アンケート（嗜好）調査を実施しました。学生はアンケートの集計、栄養価の計算、価格の計算などを行い、最終的な成果として、年度末に美波町・道の駅日和佐に報告書を提出しました。

平成28年度に入り、7月にうみがめ祭りがあるのでそこで試験販売をしてもらえないかという話がありました。それでまず学生の参加呼びかけをしました。前年度から継続の学生に呼びかけをしたのですが、なかなか人数が集まらず、1年生にも参加を呼びかけました。最終的に1年生、2年生各4名ずつが参加し、当日は朝から四国大学でパンを製造して、美波町へ持ち込んで試験販売を行いました。平成29年度には地元のパン屋さんがひじきパンの販売をしてくれそうだという話も耳に入って来ていますので、何らかの形になりそうだという事で学生とともに喜んでいる状況です。

地域連携教育の成果と課題

以上のような地域連携を行っています。ご紹介しま

した2例につきましては本学のSSOのコーディネーターを介して連携依頼があり、連携活動をしていく上での日程や移動手段、経費等の調整をして頂きましたので、私としては大変助かりました。それと実際に卒業実験と「食栄ふあくとりー」での連携活動の例を申し上げましたが、依頼や目的によって、どの様な取り組み方を行っていくか学生の様子を見ながら決める必要がありました。

最後に特にお話をした2例について、どのような成果や課題があったのかを簡単にまとめます。成果の1つは教育的な効果です。社会人基礎力に繋がり、人としての成長が見られますし、地域および地域の課題を理解するという点においても成長がみられます。徳島に住んでいても、徳島の事あるいは徳島の地域の課題というのは知る機会が少ないので、学生にとって大変教育的な効果があると思います。2つ目は教育や研究の成果が少しではありますが地域に還元できたかと思っています。それと地域の課題解決への貢献になる、なるようにしていきたいとの思いがあります。

課題について、1つは時間的な課題があります。栄養士の養成をしておりますので、実験や実習があつて時間割が過密な中で、どのように学生の空き時間を

作っていくか、という問題です。次に教員の時間。これは、自分たちでこれを考えなさい、あるいは自分たちだけで行って地域との連携活動をしてきなさいというのでは、学生はなかなか動かない。教員が一緒になって、連携活動をしていく必要があります。学生、教員、双方の時間を調整しながら進めていく必要があります。特に今回事例報告を行いました2例は木屋平や美波町に行くまでにも時間がかかります。そういう移動時間の確保についても考える必要がありました。2つ目は人的な問題です。取り組み方にもよりますが、正課科目の卒業実験で取り組んだ場合は学生がすでにある程度限定され、担当する学生が確保されますが、自主活動の「食栄ふあくとりー」では参加学生を確保するところから始めるため、ちょっと大変だなというところがあります。

3つ目は地域の課題解決への貢献です。これは成果のところでも述べましたが、地域連携というのが本当に地域の課題の解決につながっているのか。それをどのように検証できるかを見出さなければならないことが課題です。

以上、食物栄養専攻で行っている地域連携の報告をさせていただきます。どうもありがとうございました。